
おもちゃの国のアリス

明光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おもちゃの国のアリス

【Nコード】

N0720H

【作者名】

明光

【あらすじ】

庭でまどろんでいると、白い髪の青年がアリスの前に立っていた。そして、彼の指差した先に二足歩行で歩く白ウサギを目撃。体の動くままに白ウサギを追っていると庭に空いた穴に落ちこちてしまった。目が覚めると見知らぬ国と光景が目の前に広がっていた。とりあえずは全年齢対象ですが、残酷な描写が出る事もありますので、その場合は、【 】を入れさせていただきます。

00幕 『慰めの国へようこそ』（前書き）

はじめまして。

この話はプロローグのような者ですので、

（多分）見なくても大丈夫だと思います

00幕 『慰めの国へようこそ』

ザアアアアア

雨降る夜、私は墓場にいた。母に会う為に。

「久しぶり。それと、Happy birthday. ……大体5年ぶりかな？」

特に何をするわけでもなく、私は傘もささずに母の墓標の前に突っ立っていた。

「もう何年か経ってるんだよね……時間が経つのは早いね」

雨に打たれ、体温が下がってきた頃、急に雨がやんだ。

いや。雨は止んだのではなかった。

自分と雨の間になにか、遮る物が入ったのだ。

「お嬢さん。こんな所で傘も差さずにいかがいたしましたか？」

驚いて上を見上げると、黒い服：喪服を着た白い髪の青年が後ろに立ち、私を傘に入れてくれていた。

雨で、しかも夜。彼のその白い髪は、薄暗闇の中で月に照らされ銀にも似た美しさだった。

「どうぞ。」

アリスに差し出された青年の手元には暖かい缶が握られていた。

「あ……………。どうも…」

綺麗な微笑と美しい白髪に見惚れていた私は戸惑いながらも彼が差し出していた缶を受け取った

「先程も聞きましたが、お嬢さんはこのような所でいかがでしたのですか？」

「お墓参りです……………」

「そうですね。」

彼は他に何かを聞くでもなく、去るでもなく私を傘に入れたまま、ただ静かに口を閉じていた。

「……………」

「……………」

「……………ナ様は、」

「へっ？」

いきなり、白い髪の彼が沈黙を破り、口を開いた。

「あなたの姉様は、素晴らしい女性でしたか？」

「え……………」

突然の質問に、答えがすんなりと出てこない。

この質問の答えは、すぐに出てくるはずなのに。

「ええ。とても…………とても素晴らしい女性むすめです。綺麗で。何でも出来て…………とても優しいですよ？」

なぜこの人は、過去形で言うのだろうか？

「では。母上様は……」

彼は何かを言いかけて口を噤むんだ

「あなた様は、ご家族に恵まれていらっしゃるのですね。」
「そうですね。」

そう。とても……とても恵まれている。だから、姉さんには

「えっ。お、お嬢さん?!」

急にうるたえだした彼に私の頭の上には『?』が浮かぶ

「どうしたんですか？」

「それは私のセリフですよお嬢さん。ど、どうしたのですか!？」

「へ……………」

「泣いているではありませんか!」

「な、なに……? だれが……?」

「何を言っているのですか? お嬢さんの事ですよ! 泣いていらっしゃるではありませんか!!!」

「え? え? ? え? ? ? ?」

泣いてる? 私が?

顔に手を当ててみたら生暖かい水が手を伝った

「ほ、ん……とう、だ……………」

「姉……母上様の為に泣いていらっしゃるのですか?」

「わか、り……………ま、せ……………ん。」

この人に言われてからか、一気に熱い水が溢れ出してくる
泣いてはいけない。涙を流してはダメ。

そう思つて涙を止めようとしているのにあふれて、あふれて、止まらない

泣けなかったのに。母の葬式時には、一滴も涙を流せなかったのに……

「冷たい人間、なの、に……」

「『冷たい人間』？あなた様が、ですか？」

彼は不思議そうな表情で聞き返してくる

そう。

『なんで？なんで泣かないの?!』

イーデイス……

『姉さんは悲しくないの!?!』

『イーデイス！やめなさい!』

姉さんに怒られても涙を流したイーデイスは言葉を止めない。
父に似た、気の強い妹。気の強い目を私に向ける

『母さまが死んだのよ？なぜ姉様は泣かないの?!』

『ロリーナ姉さま!!あたしは姉様が信じられないわ!こんな時に泣かないなんて……!!!』

「ごめんなさい。・・・ごめんなさい。」

『姉様は、冷たい人間よ!』

こんなに言われていたのにこんな時に私が思ったのは、

(ああ。この子は、イーデイスはやっぱり父さん似ね。)

だった。

いつもの私だったらイーデイスを叩いていたかもしれない。

『嫌い嫌い、大っ嫌い!!』

『イーデイス! いい加減にきなさい!』

嫌いでいいから。許してくれなくても良いから……………

姉さんを悲しませないで。

姉さんを困らせないで。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

イーデイス、ごめんなさい

姉さん、ごめんなさい

「泣いてあげられなくて、ごめんなさい……………」

ごめんなさい

あの時、泣いてあげなくて、ごめんなさい

「お嬢さんは、冷たい人間ではありませんよ」

「……………」

私の後にいる彼はにこりと微笑んで続けた

「『冷たい人間』には涙を流す事は出来ないでしょう？」

「……………」

柔らかく微笑んでいるその顔は酷く綺麗だった

また、涙が溢れてきた

嬉しかった。

今まで誰にもそんな事を言われたことがなかったから。

……………なぜ、知らない『赤の他人』に慰めてもらわなければならぬ
いのだろう

（この人は、何も知らないのに…………）

そんな事、知っている。

分かっているのに安心する

この人の言葉を聞いてみると、とても安心する

「おや。そろそろ時間ですか」

アリスの涙が落ち着いた頃、気づいたように美しい装飾の懐中時計
を開いて彼は呟いた

「お嬢さん、私はそろそろ行かなければなりませんので」

彼は少しかがんで自分が持っていた傘をアリスに持たせ、恭しく一礼して墓場の出口へと足を運んだ

「お一つだけ、言い忘れた事が」

何かを思い出したように足を止める

いつか…いつかあなたをお迎えに参ります。」『アリス』リデル』嬢

………と、彼は顔だけこちらに向けて、柔らかい笑みを浮かべた

「では、またいつか。…お嬢さん、早くご自宅にお帰りになられるよう。

手厳しいお父様がお怒りになられますよ」

最後の言葉だけ冗談めかして言って、気づいたら、彼は消えていた。

01幕 『不思議な国へようこそ』 (前書き)

やあ。アリス

さっそくだけれど、

金の装飾の懐中時計を目印に
白いウサギを追いかけよう

01幕 『不思議な国へようこそ』

「う…ん……………」

のどかな春の陽だまりの中、うつすらと目を空けると、ぼんやりと青と白の空を眺めた

「あら。アリス、起きたのね？」

「姉、さん」

隣には、のんびりと本を呼んでいる、アリスの姉のロリーナの姿があった

『ようやく　　ようやく会えますね』

「？」

声が……………した。若い、男の人の声が聞こえた……………ような気がした

「…今、」

「？」

「声が、聞こえたような気がしたの」

「声？」

姉さんは本から視線をわたしに移して小首をかしげた

「うん、声。聞いた事のあるような、無いような
…曖昧な感じなんだけど。……………姉さんは聞こえた？」
「いいえ？」

姉さんも聞こえたのではないかと訪ねてみたら、
全く、とふるふると首を横に振った

「そう……………」

さっきの声は空耳？

考え込むように黙ってしまったアリスに続いて、ロリーナも何かを
考え始めた

幾秒かした後、ロリーナが何か思いついたように顔を上げた

「アリス、それはあの子達の声じゃないかしら？」

姉さんは向こうの草原で遊んでいる子供たちを指差した

「楽しそう……………」

アリスは、向こうの草原ではしゃいでいる子供たちをぼつと眺め
ている

きつと、きつと、さっきのは、空耳。

折角、こんなのかな陽だまりの中で大好きな姉さんといえるんだか
ら。

この幸せな時間を無駄にはしたくない
そうだ。さっき見た夢の話しよう

姉さんは人の夢の話を書くのが大好きだから

「姉さん、あのね……………」

「ロリーナ姉様、お父様がお呼びよ！」

アリスの妹のイーデイスが大きな声でロリーナを呼ぶ

「あらあら、何の御用かしら？今行くわ、少し待っていて！」

ロリーナは大きな声を出してはいないが、離れた所にいるイーデイスには聞こえたらしく、

「わかったわ」とだけ頷いて家の中に入って行った

「アリス、さっき何を言おうとしたの？」

本を閉じて、立ち上がった姉さんは身を屈めて聞いてきた

「うん。大した話じゃないの。父さんの用事を優先して？」

わたしは、自分出来る限りの笑顔を姉さんに向ける。

「そう？じゃあわたしが戻ったら聞かせてね？」

「うん。行ってらっしゃい」

姉さんもわたしに満面の笑みを見せて、家の中へ消えていった

「ふっ……………」

アリスは特に何をするでもなく大きな木に寄りかかって、
のどかな陽だまりの中ではしゃぎまわる子供達を眺めていた

(また……………眠くなってきた)

うとうととして溶けていくように陽だまりの中でアリスは目蓋を閉じた

「ふぁ……………あれ？」

まだ昼だった。随分と眠っていたような気がするが、空を見ると30分、1時間程しか経っていないようだった。姉さんはまだ戻ってきていない

(父さんの話、長いのかな?)

「おはようございます。」

不意に上から声がして見上げると白い髪 of 青年が目の前に立っていた

「大変お久しぶりですね。もっとも、あなた様は覚えていらっしゃるかもしれないませんが。」

誰?

思い出せない。この人物は誰なのか

いや。うつすらとは覚えている。

もう何年も前の母の葬式の日に出席していて、

白い髪が印象的だったのを少しだけ思い出した

彼は、憂い気に微笑んで言った

「迎えに幾年もかかってしまい、申し訳ございません」

「え……………」

迎え……？

一体なんの？

『さあアリス

白いウサギを追いかけましょう』

青年は腕を伸ばして森を指差した。

そこには赤い服を着た二足歩行のウサギが走っていた

アリスはゆっくりと立ち上がって、駆け出していた

追いかねなければいけないような気がして、足が勝手に白ウサギを
追いかけていた

『そうです。さあ、そのまま白ウサギを追って

穴へ飛び込みましょう』

ああ。そつだ…………

どこかで聞いた事のある声

まだ、分からない。
でも、不思議とわかる

わたしは白ウサギを追って、

思い切り穴へ飛び込んだ

落ちる。落ちている。

深い、とても深い穴

どこまで続いているのか分からない

…このまま落ちては死ぬかもしれない。

でも、不思議と怖くない。

なぜだろう？

あ。母さんが昔、読んでくれた童話だ。

わたしと同じ名前の女の子。

…『リデル』っていうのも一緒だったけ？

まあ、いいか。

わたしと同じ名前の女の子が、白いウサギを追いかけて……

帽子屋のお茶会。

暴君女王様の裁判。

そして、それは全て夢？

おかしな出来事も全部おかしな夢だった？

この童話はおかしな所で終わっている。

主人公のお姉さん……ロリーナ、だっけ？

ああ。これも一緒だ。

母さんはアリスが好きだったのかな？

アリスは深い穴に落ちているのにとても落ち着いている。

(今、落ちている。これも夢？)

落ちながらぼんやりと考える。

もし、全部夢で……この先に不思議な世界が繋がっているとしたら？

この先は楽しい世界？

それとも、悲しい世界？

後は……

何も無い、真っ白な世界？
何も見えない真っ黒な世界？

… ああ。光が見えてきた

そこで、わたしの意識は途切れた

01幕 『不思議な国へようこそ』（後書き）

投稿した後もちまちまと修正を入れています。

誠に申し訳ありません。――（<

目標として一ヶ月〜四ヶ月の間に投稿したいです）・――（

>>次回『おもちゃの国へようこそ』

02幕 『おもちゃの国へようこそ』 (前書き)

落ちる おちる

おちていく

この先には何がある？

楽しい世界？ 悲しい世界？

何も無い、真っ白な世界？

何も見えない真っ黒な世界？

いらっしやい アリス

02幕 『おもちゃの国へようこそ』

「じじは、どこだろう？」

「じじは、どこだろう？」

アリスが目を覚ますと見た事の無い景色が広がっていた

「んう？」

塔？とつても高い...

風が気持ちいい

見晴らしもいい

そう。風が気持ちいい。見晴らしもとてもいい

しかし、

「じじは、どっ？」

アリスは、外の景色に向かって大声で叫んだ

いや！本当にじじどっ！？

お願い！夢なら覚めて！！

「……さい」

「へ？」

急に後から男性とも女性とも似つかない声が聞こえてきた

「……………さい」

振り返ると黒いローブを目深に被ったとても怪しい人物がいた

「……………なに？」

「はい？」

「……………何しに来た」

「えー…と」

まず、この人は誰？

「アンディング」

「あい？」

アンディング？

「アンディング＝アリストル」

「なに？」

「ディーンでいい」

「な、なに？」

「名前」

「名前？」

「お前の、名前」

「え。ディーンってあなたの名前？」

「そう。」

「あ。そうなの……」

短い……この人、一言一言が短すぎる！
言葉のキャッチボールは？！

「だから。名前」

「わたしの？」

「そう。お前の」

「あ、アリス＝リデル」

「わかった。」

「……」

「……」

え。もう終わり？

「……『アリス』」

「え……？」

「……あ……」

この人……ディーン（だっけ？）が何かに気付いたように、わたしの後ろを眺めた

「ディーン？……え！？」

しかし振り返ると何もなく、ディーンのほうを向き直るとついさっきまでいた筈のディーンはいなくなっていた

「な、なに……？」

なんなのここ…

見知らない風景

見知らない人物

いきなり消えたアンディングとか言うとても怪しい人
一体何なの？わたしの日曜日はどこに行ったの？

「あ。ようやく見つけましたー!!」

「ひゃあ!？」

足音がしたかと思うと先程の白髪の青年が息を切らしていた

「よ、よかったです。どこに行ったかと思ったらこんな所にいたの
ですね」

「な、なに……………」

喜びのような安堵のような表情を浮かべて彼は近づいてくる

「私がついておりながら、大変申し訳ありません。
女王陛下に申し訳がつきません……………」

なんなの？なんなのよ……………

「申し訳ございません。私の名は『ハング』と申します」

「あ。どうも…わたしはアリス＝リデルと言います」

「存じ上げております」

「はあ……………」

暫くすると息が整ったらしく、ハングと名乗った彼はにこりと微笑んでアリスに一礼した

「あの……名前は分かりました。ここってどこですか？」

「ここは【おもちゃの国】」

「おもちゃの、くに……」

なんだか可愛い名前だ。

しかし、わたしが習った世界中の町や国に、そんな名前の国は無い新しく国ができたと言う話も聞いていない。

そもそもそんな名前の国が出来たらすぐさま報道されている筈だし……

そんなアリスの心境を読み取ったのか、ハングはくすりと笑って再び口を開いた。

「ここはあなた様の世界とは異なります

いわゆる『異世界』……とでもいいでしょうか？」

……い

「異世界いいいい？！」

「わっ、わ、わー！し、静かにしてください！アリスー！！」（小声）

アリスが思わず大声をあげると、ハングが素早くアリスの口を抑えた

「はぁ……」

「落ち着きましたか？」

「はい。……ごめんなさい」

「いえ。いいですよ。私の方もご無礼を」

口だけではなく、心から言っているようだ。
まるで耳があつたら、へ垂れているような……

耳……………うーん。

例えるとウサギ？

白髪だから、白ウサギ？

……………ん？

ウサギ、白ウサギ？

「あー　　っ！！！！……………ムゲツ」

「お静かに！頼みますからお静かにしてくださいませ！」（小声）

アリスは再び口を抑えられた状態でコクコクと首を上下に動かす

「ぶはっ……………」

「ふう。アリス。ここは立ち入り禁止区域なので……………」

「な、あああああ！？」　　んぐぐっ」

「ですからお静かに！」（小声）

「んぐぐっ！むうむ！！」

「お静かにしていただけますか？」

コウコクコク、とアリスは必死に首を動かす

「ふはあ……………」

「本当に、勘弁して下さいませ」

「はい。ごめんなさい」

「いえ。私も…乱暴をいたしまして……………誠に申し訳ありませんでした。

そうですね。私としても、いつまでもこの場にいるのは気が進みませんし……………」

「はあ……………」

「ひとまずはここを出ることにいたしましょう」

それから状況を説明いたします、とハングはわたしの手を引いて見晴らしのいい塔から降りていく

「はあ、はあ……」

疲れた…この塔って一体どれくらい高いの?!
降りるだけでこんなに疲れるなんて………

「大丈夫でございますか？」

「は、いい……」

何でこの人、そんなに平気なの!?

「近くに小屋がございます。そちらに参りましょう」

「は……いい……」

ハングは疲れきったアリスの手を再び引いて、少し離れた小屋に向かう

「ふはあ……」

「どづぞ。」

「どづも。」

疲れた上に歩かされたアリスは小屋にたどり着いてから、ぐったり

とイスにもたれかかった

「申し訳ありません。アリスの体力を考えに入れてませんでしたね」
「次から入れるようにお願い、します……」
「かしこまりました」

そうやってハングは綺麗な姿勢で、一礼した
…この人、根っからの執事気質だ。

「そうだ。」

えっと、ここ…おもちゃの国、とか言っただけ？」

「はい。そのとおりです」

「その、始めから説明してもらえます？」

「わかりました」

そうやってハングも近くのイスに腰掛けてこの国のことについて説明を始めた

02幕 『おもちゃの国へようこそ』（後書き）

色々と変です。

そして1・2話と3話からのアリスの性格が変わっています
次回からチヨクチヨクとキャラ説明を入れています！
・・・さて。最後まで頑張らねば。

>>次回『異なる世界へようこそ』

03幕 『異なる世界へようこそ』 (前書き)

さあ、

これからこの【おもちゃの国】について説明いたします。

必要の無い方は見る必要はございませんよ。

では、説明を始めましょうか

03幕 『異なる世界へようこそ』

先程も申し上げましたが、ここは【おもちゃの国】と申します

あなた様の世界とは異なる世界：つまりは異世界でございますね

……………ええ。あなた様がこの国へ来られたのは白ウサギを追って
ですね

え？あの白ウサギは私だと？

くすくす。いえ、失礼

ええ。確かに私はこの国では「白ウサギ」と呼ばれております

あなた様を導いたのも私です

なぜ？

くすくすくす

……………さあ？なぜでございますでしょうか？

まあまあ。この国のお話でございますね？

あの塔は何なのか？

アンディングと言う人物は何なのか？

アリス：あなた様は時の番人にお会いになられたのですか？

不気味な赤と緑の森は何なのか？

不気味って……………

落ちついてください。アリス。

一つひとつお話いたします

あの塔は『立ち入り禁止区域』、と先程申し上げましたね？

そうですね。あの塔はとても美しい

『立ち入り禁止区域』と言うのはおかしい表現ですが……
はは…他の表現方法がわからないのですよ

実際に立ち入った者は、『掃除屋』とでも申せばよいのでしょうか？
ええ。まあ。とりあえず掃除をされてしまうのですよ
いえいえ。とりあえずは物騒な事はございませんよ
くすくす

とりあえず………ですけどね
え？いえいえ。何でもございませんよ？

気になさらないでください

気になると申されましても…ねえ？

ほらほら。座ってくださいませ

続きが説明できませんから。ね？

はい。ありがとうございます

まあ、そういう事で色々あり、あの塔付近は立ち入り禁止区域なのですよ

ここ……でございますか？

いえ。ここはその区域には入りません

立ち入りの禁止な区域は塔の中と、後はごく付近の場所だけですから
あの塔に立ち入って罰せられないお方、ですか？

そうですね……とりあえず『番人』でしょうか？

そうです。番人は立ち入りを許されているはずでしょう

『番人』とは何か？という事か？

その話も順に。

我が国には『番人』は2つあります

まずは『時の番人』

あなた様は先程、アンディングと名乗る者にお会いになられたでしょう？

その通り。

あなたが先程お会いになられたアンディングが『時』の番人でございます

彼が消えた？

ええ。そうですね。彼はいつもいつもその様なものでございますよ突然現れたり、いきなりに消えたり……

この国でも彼に会えるのは極少数なのでですから
運がよろしかったですね。アリス

わっアリス?! すみません! すみませんでした!

怒らないでくださいませ!!

……… 申し訳ございませんでした!!!

…え? 『時の番人』誰なのか?

ああ。もう一人の『番人』は「トカゲ」こと、『真実の番人』でございます

いえいえ。ふざけている訳ではありませんよ?

爬虫類が真実の番人をしているわけがない、って……

アリス。トカゲと言うのは二つ名です

ほら、私にも「白ウサギ」と言う二つ名がありますでしょう?

彼はアンディングのように滅多に会えないのか?

いいえ。彼はそうではありませんね。

むしろ、私の場合はほぼ毎日お会いになっております

全くもって『番人』のありがたみも無いほどに。

それよりも、不気味な赤と緑の森というのはどういことでしょう

か？

あの塔から外を見ていたら緑の森に赤の斑模様に乗っていた？

あー…あれでございますか……

また帽子屋様でございますね

えっ?! あれって何か? 帽子屋とは誰?

いえいえいえ! 何でもございませぬ。こちらの話です!!

ま、まあ……他には色々ありますが、とりあえずは

<この国のものには皆ではないが『二つ名がある』>

<この国は、『ゲーム』と『ルール』で成り立っている>

………と、だけは言えます

詳しい所はご自身も瞳で見られることを推奨いたします
後はもうひとつ、

<この国のものは皆 おもちや である>

さて、もう体力は回復いたしましたね?

では参りましょう。

どこへ?

私の敬愛なる主君がいらつしやいます。

ハートの城にございますよ

そのまま、行きましょ。う。

アリス

03幕 『異なる世界へようこそ』（後書き）

全セリフがハングでした。

ぜんっぜん大切なことは書いていない気が・・・
そ、それは本編で説明するってことで！

ハング『白ウサギ』

根っからの執事気質で常に（？）礼儀正しい
たまに含みのある笑いをする。

かなりの苦勞人らしい

実は少しばかりヘタレだったりした

（現時点、アリス視点の記録です）

>>次回『ハートの城へようこそ』

04幕 『ハートの城へようこそ』 (前書き)

ついて来いって言われたからついてきちゃったけど・・・
わたしがこんな所に来てよかったの？

・・・なんかスゴク怖い

04幕 『ハートの城へようこそ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

わたし、アリス＝リデルは白ウサギ・・・

ハングと名乗った白髪はくはつの青年に連れられて只今ハートの城とかいう建物の中にいます

「如何いかに致しましたか？アリス」

「あ、いや・・・あまりに立派なモノで・・・・・・・・」

お世辞ではなく、本当に凄い。

城って言うだけあって大きい。

ここまで歩いてくるまでに、何人もの使用人やメイドさんを見かけた。

・・・・・・・・

あー。思わず使用人やメイドさんの着ている服を着てみたいって思ってしまった・・・・・・・・

「お気に召しましたか？」

「は、はい。」

「そうですね。それは大変嬉しいことです」

青年・・・ハングは隣に並んで歩いているわたしに顔を向けてにっこりと笑った

・・・・・・・・この人、真顔でもいいけど笑うと酷く綺麗なんだよね・・・・・・・・

柔らかい目に優しい口調、それに執事で柔軟な性格・・・
優しい人が好きな人は即刻ノックアウトだよ。ハングって。

い、いや。それよりもこの城の事だ。

「この城って赤いですね？」

「そうでございますね。目が痛くなるほどに赤いです。」

「何でこんなに赤いんですか？」

「なぜ、と申されましても……。」

陛下がお決めになられた事だから……。と、だけしかお答えできませんね」

ハングは苦笑をしながら大きな扉の前で、足を止めた

「陛下って、王様のコトですよね？」

「ええ。その通りでございます。さて、こちらが謁見室になります」

「えっけんしつ……」

わたしが言葉を繰り返すとハングは頷いて、大きな扉の取っ手を
持って奥に押した

「陛下。女王陛下。失礼致します

白ウサギにございます」

ハングは入ってすぐに王様と王女様おついでさまらしい人に一礼した

「ハング！お帰りなさい。遅かったわね？」

ハングが来ている事に気づいた王女様らしい人が、
高いところから降りてきて私とハングの方に近寄ってきた

「！」

ハングは上の立場の人に意見はしにくいらしいが、
先程からの会話を聞いていたら、この人に意見を言っても一応は
咎められない立場らしい

「いいじゃないの。ねえ？アリス」

（かつ・・・カワイイっ！）

この王女様はわたしより身長が低いのだが、
斜め下からの上目目線はとてもかわいいっ！

「うるさいぞ。」

わたしに抱きついていている王女様を私から離れるように説得するハ
ングと、

それを真つ赤になりながら見ているわたし達3人の頭上から、静
かで、低い声が聞こえた。

反射的に上を見上げると、座に座り頼杖ほおつえについてわたし達を見下
ろしている人物がいた

「へ・・・陛下・・・」

「キング？」

「貴様はその小娘こむすめから離れる。」

『陛下』と呼ばれたその人は、この城の主じみらしい。

王女様は王様に言われておすおすとわたしから離れる。

「女。貴様は何者だ。」

「あ、アリス＝リデル……です」

「貴様の名前などとくに聞いている。

我が聞われいているのは、なぜこの場にいるのかだ」

「なぜ……って……」

「貴様は見た所、余所者ではないか。

なぜ余所者などがこの場にいるのだ。白ウサギ？」

王様に指名されて睨まれたハングは一瞬びくついたように見え
たが、

すぐに顔を上げて王様の問いかけに答えた

「アリスは私共わたくしの客人にございます。

……ですから、長き時をかけ迎えに行つたのです。」

「答えになつておらぬ。

貴様は、私の許可無く余所者を我が城内に招き入れたと申すか。」

「……………はい」

王様は舌打ちをして、イラつているのが分るように、先程より
低い声で言う

「兵。そのアリスとか言う小娘を捕らえよ。」

すると、謁見室の両脇に構えていたらしい兵士がわらわらと出て
きてわたしの周りをすぐさま囲みこんだ

「ちよ、ちよつと！やめてよ！！」

「暴れるな！」

「王の命令だ！」

「放してつてば！！」

兵士は精一杯抵抗するわたしを押し付けようとする。
しかし、そうはいかない。

わたしだって伊達だてに学校のいじめっ子とケンカをしていたわけじゃない。

「見苦しい。早々に取り押さえる。
でないとその兵士はみな、打ち首だ」

王様のその言葉に周りの兵士の顔が一斉に真っ青になったと思っ
たら、
すぐにわたしが抗えないくらいの力で取り押えられてしまった

「即刻その小娘を斬首刑にせよ。」

王は兵士たちに抑えられたアリスを見下ろして言い捨てる。

ああ。わたしの人生はここで打ち首になって終わりなのかな？
何ともあっけなく空むなしい死に方……。

しかもとても短い人生。だったの16年しか生きていないのに……

白ウサギを追わなければ、死なずに済んだの？

……いや。それはどうなんだろ？

トラブルというものはどこに転がっているかわからない
コレもそのひとつかもしれないし……

何の抵抗もしないアリスに興味を失ったのか、

この場から退室しようとした時に謁見室には大きな声が響いた

「お待ちになってください!!」

その声の主はハングではなく、もう1人の王女様だった

「……なんだ？」

「わ、わたくし。アリスを気に入ってしまいましたの。」

「それがどうした？」

王女様はアリスを見たあとに王様を見てにっこりと微笑んだ。

「ですから、アリスを私の客人としてこの城に入ることと、

もしアリスがハートの城に滞在したいと言ったら滞在を許可して
いただきたいの」

「……勝手にしろ。」

「ありがとうございます！」

「小娘を解放しろ。」

王様がそう言うつとわたしを取り押さえていた兵士たちが次々と引
いていった

「だ、大丈夫ですか?!アリス!」

「う……うん。あ、ありがとうございます。」

「いいのよ。それより無事でよかったわ」

「女王陛下、アリス……申し訳ございません。私が無力なばかりに」

「ハングはそれなりの権力と実力は持っているのだから

本気になつたら兵士なんて赤子あかしも同じでしょう?」

そうなの?

そんなに強いのか?

そうは見えない……

「い、いえ……ですが……」

「あーっもうっ! ハングったら本当にヘタレね!!!」

「う……へ、ヘタレって……」

「ほら! そこで涙目にならないの!」

……わたしの中でハングの評価が執事で柔軟な性格にヘタレがプラスされてしまった

「で、ですが……!」

私めが行う殺傷は『時の番人』にて禁止されているはずで……

「だあかあらあ! 何で番人なんかのいう事なんて鵜呑みにするのよ!!!」

「番人のいう事は絶対って女王陛下も行っていたじゃないですか!」

「なにを言っているのよ! 絶対なのはキングのいう事に決まっているじゃないの!」

(……なに?)

何? この2人……

最初はカツコイイとか思っちゃったけど……

なんかくだらない(?) コト言い合ってるし……
なに? なになになに?

不気味な赤い斑模様またひの森もあるし

「このお城の王様には殺されそうになるし
わたし、

まさか

とんでもない所に来ちゃったんじゃないの?!

04幕 『ハートの城へようこそ』（後書き）

今回は王様と王女様（仮）が出ましたw

そしてまたもやヘタレなハングが出ますた

次回にまとめて2人紹介しますので今回はおやすみで

>>次回『不規則な時間へようこそ』

05幕 『王女？女王？お姫様？』

こんにちは。

わたしはアリス＝リデルと言います。

今現在わたしの目の前で口喧嘩くちげんかのようなやり取りが行われています。

口喧嘩をしているのは白ウサギと呼ばれた『ハング』と

まだ名前も知らない王女様やお姫様やらの人です

「あ、あの……」

「大体、女王陛下は職務をサボりすぎでございます！」

「なによ！ハングなんてあんな兵士なんかに出しできないくせに……！」

「女王陛下は」

「ハングだって」

始めはレベルの高い言い合いだと思ってたのに段々とレベルが・

「あ、あの！わたしを無視しないでください！」

「「あ。」」

（やっぱり空気化されてた……）orz

「も、申し訳ございません！」

「ごめんなさいねアリス。」

「もういいですよ……。」

「アリス、お願いだから拗すねないで？」

わたくしの名前は『ティー』って言うの。よろしくね？」

王女様は先程の口喧嘩が無かったかのようににっこりと笑ってわ

たしに左手を差し出してきた。

「よろしく・・・王女様？」

わたしがそう言うとハングが近くに寄ってきてこっそりとアリスに話しかけた

「アリス。一応このお方は女王陛下にございます」

「え。ホント？」

「本当です。そもそも王女なのでしたのならば陛下に意見をした時点で罰せられてしまいます」

「・・・そうなの？」

「陛下はそういうお方ですから。」

「ああ・・・そう言えばわたしも殺されかけましたねー……………」

「

そう言っているアリスの目は遠い明後日を見ていることに自分で気づいていないのでありました

「ねえ。ハング、アリスと何を話しているの？」

「何でもございませんよ。女王陛下」

ハングはわたしから離れて、

につこりと人当たりのいい優しい笑みを女王（だったらしい）に向けた

「そう？」

「ええ。ねえ、アリス？」

その笑顔を突然向けられたアリスは真っ赤になりながら首を縦に

振った

「ねえねえアリス。わたくしの事は『ティー』って呼んでね？絶対よ？」

「あ。はい。わかりました」

「敬語も禁止よ！」

「はい。了解しました」

「ほら！ダメよ！わたくしは敬語を禁止って言ったのよ？

はい。今から敬語は絶対に禁止！後は必ずわたくしの事をティーって呼ぶのよ？」

そう言っただけで女王……ティーはパンツと手を鳴らしてコレを敬語等禁止の合図にした

「じゃあ、もう知っているけれどもう一度言うわね？

わたくしの名前は『ティー』二つ名は「ハートの女王」

二つ名の通りにこのお城で女王をやっているわ。

ほら。ハングも言いなさい。」

「え。ですが私の事はアリスにもう……」

「いいから言いなさいな。」

アリスは自分のことをもう知っている、といいかけるのを中断させる

「わかりました……」

私は『ハング』と申します。二つ名はご存知の通り「白ウサギ」でございます

え……と、この城内では宰相と言う立場に務めております」

……え？

「い、いま、なんて？」

「は？さ、宰相と・・・な、なにか？どうしましたか？」

「イ、イイエナンデモアリマセン・・・」

「は、はあ・・・」

「そうだよね・・・」

うん。宰相さんならちよつと位王様や女王様に意見しても大丈夫だよね・・・多分

つと言つかわたしってそんな人と軽々しく話しちゃってたんだ・・・

いや、普通に女王様を呼び捨てにしちゃってるんだけどさ？
それはほら、命令だしね？

そうアリスがいろいろな考えが頭の中を駆け回っているときに
クスクスと笑い声が聞こえた

「？」

「クスクス・・・アリス、心配せずとも大丈夫ですよあなた様は
客人。」

多少の無礼も許されるでしょう」

「え・・・まさか」

「アリス、アリス。あなた声に出して言っていたわよ？」

「ま、マジすか?!」

「マジよ」

「そうそう。私には何なりと気軽にお言いつけくださいませ」

「は、はあ・・・」

「それと、私の事は是非とも呼び捨てでお呼びませ」

いや。無理でしょ。

05幕 『王女？女王？お姫様？』（後書き）

ティー『ハートの女王』

外見年齢は低く、慎重はアリスよりほんの少し小さいくらい

ハートの王のことが大好きでいつも「美しい」

やれ「美しい」やれ言っている・・・らしい？

紅茶と可愛いものとスイーツが大好き

職務を良くサボって逃げるたびにハングに小言を貰っていたりする
という

（現時点、アリス視点の記録です）

>>次回『不規則な時間へようこそ：2』

06幕 『お茶会の時間へようこそ』

「あー。あー・・・その・・・それよりもこの国について教えてくださいませんか？」

「あら？ハングが教えてあげたんじゃないのかしら？」

「あーと・・・ルールがどうたらーとかだけ・・・」

「あらあら・・・ダメじゃないのハング！ちゃんと教えてあげなきゃー！」

「も、申し訳ございません！」

ただ、あの小屋には休息に立ち寄ったので、詳しい話はこちらで・・・と思っただけです」

「へ？あなた達塔の方にいたの？」

今までハングに向けられていた視線が急にわたしに向いて思わず慌てて言い返す

「は、はい。えと、目が醒めたらあの塔に最上階らしいところいた・・・ヨ？」

「ふうん・・・そうね。あの塔には立ち寄りたくもないものねうんいいわよ。じゃあお茶にしましょうー！」

ティーはそう言ってパンパンパン、と手を叩いた

「お茶・・・？あの一この国の説明は」

「アリス、女王陛下はお茶の時間だけは曲げない頑固者ですので・・・」

「聞こえてるわよ、ハングー！」

「おや・・・それは申し訳ございません。女王陛下」

あれれ？ハングさんハングさん？さつきと口調とか少しばかり変わってませんか？

「ねえ、ティー……」

「うん？」

「ハングって一旦スイッチ入るとあれだけど

実はちよつと毒舌キャラ？」

「毒舌……というよりは、いじめっ子じゃないかしら」

「……いじめっ子？」

「そうなのよ！わたくしは休憩時間を満喫しているのに急に書類の束を持ってくるのよ！！」

「それは女王陛下の休憩が多すぎて以前から溜まっていた重要書類の束でございます」

「……そ、それに！」

わたくしがせこせこ書類にサインをしているのに次から次へと持ち込んでくるのよ！！」

「それも先程申し上げた通り、女王陛下が、溜めに溜め込んだ書類でございます」

「うっ……むう……」

「ティー……」

「うっ、うるさいわね！」

「うっ……ハングとアリスがいじめてくるわ……」

「はいはい。女王も宰相さんもいい加減にしましょうね」

「え……」

わざとらしく目に涙を潤ませたティーを嗜めるような声がいきなりにアリス隣から声が聞こえ、

反射的に隣を見たら目の前には水色の長髪が広がっていた

(い、いつのまに……?)

「と、言うかさ、女王にいつも言ってますよねー？」

朝にお茶会しないで下さいよ。」

「あ、朝……?」

「そーそー。サムさんに叩き起こされるあたしの身にもなって下さいよー」

おかげで眠くて……ふあぁ」

朝……?わたしが来た時にはまだ昼だったはず……だよな?

「あらグリフォン。いらっしやい」

「女王、あたしの話聞いてました？」

朝にはお茶会をしないで下さい!」

「いやよ。わたくしはわたくしの好きな時にわたくしの好きなことをするのよ」

「……それで私はあなた様の尻拭いをする事になるのですが……?」

ハングはティーの後ろでおどろおどろしいオーラを出してティーと睨んでいる

「……苦労人なんだね。ハンゲ
ティーに『グリフォン』と呼ばれた人は諦めたようにため息をつ
いている

「まあまあ、せっかくお菓子が来たんだもの。楽しくいただきま
しょう」

「女王！あたしも一緒にいいですか？」

いつの間にかわたし達の前にならべられたスイーツの数々に、
ティーたちは驚くこともなく悠然と席に座っていく
そこで水色の髪の彼女が軽く左手を上げていった……ダルそうに

「ええ、ええ。モチロンいいわよ 好きな席に座って」

「あい。どもです

「じゃあ……」

彼女は適当な席に座ろうとしていたわたしを一瞥した後、指さし
て言った

「その彼女の隣で」

「え？」

「……だめ？」

『グリフォン』はわたしより少し高い身長を屈め、わたしの顔を
覗き込んで聞いてくる

「イ、イエー！トンデモナイ！！」

「そ？なら失礼。」

全員が落ち着いて席についた頃にティーがニコニコと言った

「アリス、このお茶会が終わったならこの国について説明してあげるわね？」

「あ。うん。わかった」

「ん？なにになに？君って余所者さん？」

「え、あ。はい」

この人があまりにも物珍しそうに自分を見るものだから思わず引いておどおどと答えてしまう

それと彼女は見て取ったのか、けらけら笑いながらニコニコと言う

「あゝ。ごめんごめん。あたしの名前は『グリフォン』って言うん。

この城で菓子職人をやってるからねー

あ。ちなみに名前の方は呼び捨てでよろしく。………で、君は？」

「アリス＝リデル。よろしくね？グリフォン

……菓子職人て和菓子とか？」

「ん〜ん。菓子系なら全般いけるよ。

それはもう西洋菓子から東洋菓子までにね」

「へー！それはすごいね」

「アリス。グリフォンもお菓子はとっても美味しいのよ。

ここに並んでるのも全部彼女が作ったんだから！！」

「え?!これ……全部？」

「そうそう。起き抜けだったからこれだけしか作れなかったけど、大変だったんだから。」

ってことで、朝のお茶会はホントに辞めてください。いやマジで。切実に！！」

これだけ……これだけ……これだけ……

今わたし達の前に並んでるこれ全部グリフォンが作ったの!?
しかも起き抜け!?

ちなみに今アリスたちの前に並んでいるスイーツは
ティラミス、クレームブリュレ、パンナコッタとナタデココ、タ
ピオカ、カヌレ

アイスクリームにケーキ、プリン、ババロア……
ここにあるのは全部洋菓子だけど種類分けしたら軽く……いや
もつとあった……

「すごい……」

「へへへーそっか?すっごい嬉しいよ」

えへへー、と純粹に嬉しいらしく、グリフォンは子供らしい笑み
を浮かべた

(……グリフォンで、よく見るとわたしと同年くらい
みたい……)

でもさっきの顔は二十歳位に見えたし……)

「なんか、グリフォンもお菓子みたい……」

「……はい?」

アリス、今なんていった?

「え?グリフォンってお菓子みたい、って」

「おかしい?あたしがあ?」

「え?エ?なんかわたし変なこと言った?!

「いや……変って言うか……。あ!こらあ!!

女王も宰相さんも笑わないいい!!!」

一番始めに横顔を見た印章だと、なんか怖そうな人だったけど……

うん。やっぱり第一印象って中あてにならないね。

「ゴ・・・ゴメンなさいグリフォン・・・で、でも・・・」
「く・・・くく・・・申し訳ございません。グリフォン・・・しかし・・・」

「あっーもう！ひどいなあ！！ほら、もう夜になったからお茶会は終わりね！！！」

グリフォンは笑いを堪えているハングとティーに怒りつけた後、空になった皿（ほぼティーが食べた）を片付ける

・・・え？

夜？

グリフォンさん、あなた今『夜』って言いませんでした？

「おや？本当ですね。夜でございます。いつの間にか変わったのでしょうか？」

「いつの間にそんな時間たったのかしら？」

ティーとハングは天窓を見て平然と言う

あ。本当に夜だ・・・

わたしがこの国に来た時はまだ昼で、

グリフォンが来た時は朝になって、

お茶会が終わった時には夜？

06幕 『お茶会の時間へようこそ』（後書き）

グリフォン

水色の髪の中に一部、紫色のメッシュがかかっている

背はアリスより少し高く長袖の服をいつも着ている、

首には金の首輪がついている

本編でも出たように城で菓子職人をしている。

が、気紛れなティーのせいで朝にたたき起こされる事もしばしば・・・

（現時点、アリス視点の記録です）

>>次回『不規則な時間へようこそ』

07幕 『不規則な時間へようこそ』 (前書き)

ティーが『朝』にお茶会をはじめて、

グリフォンが『夜』になったからってお茶会が終っても、わたしがこのお城に来たのが『昼』で

なんか、ぐちゃぐちゃで・・・変。

07幕 『不規則な時間へようこそ』

「女王と宰相さんの口喧嘩じゃん？」

「まあ！あなたのお菓子を作る時間が長かったんじゃないくて？」

「絶対違うって断言できるよ。女王

・・・っていうかさ、1時間程度でコレを作れたんだから褒めて欲しいものだよね」

グリフォンは溜息をついて呆れた目つきでティーを見た

「1時間で?!」

「そうそう。スゴイでしょ？あたし」

むしろ神業です

「あーあ。グリフォンとハングのせいであんまり食べられなかったわ」

「だから絶対違う(います)って」

おお。見事なはもり

「うっ・・・アリスー助けて・・・」

ハングとグリフォンがーいじめるー・・・」

「はいはい・・・ハングもグリフォンもいじめないであげてよ
この国の話がしてもらえないじゃん」

アリスに縋^{すが}って泣いているティー(多分嘘泣き)の背中をぼんぼん叩きながら

グリフォンとハングを見る

「ああ、ああ。そうだったね。」

「ごめん、ちょっと忘れてた。と軽く謝るグリフォンに対して

「も、申し訳ございません！」

とハングはわたわたして頭を垂れている

「……ここまで対称的だと逆に面白いかもしれない

「んじゃ話すからもちかい座つてよ。ほら、女王も宰相さんも。」

「むう……」
「は、はい」

グリフォンにそう促うながされてわたし達はさっきと同じ席に座る

「で、まずアリスが知りたい事は？」

「え、えと……たくさんあるんだけど……」

「まあまあ、順に説明するわよ」

「女王が喋るとややこしくなりそうだからあたしと宰相さんだけでやりたいな」

困ったように頭をぼりぼりと掻いてグリフォンはハングとティー

に目をやる

「なっ！？グリフォンはわたくしが不要だと言いたいの?!！」

「そうは言っていないでしょうよー」

「言っただじゃないの!」

「女王が喋ると話がややこしくなるって言っただけじゃん」

「邪魔って言ってるようなものじゃない!」

「……………」

(うう……めちやくちやだあー)

何でこの人たちはこんなに話を引つ掻き回すのが好きなんだろう。

「ご愁傷様です、アリス。」

「え。ちよ、ハング？止めてくれないの?」

「女性の喧嘩に首を入れる事ほど恐ろしい事はない、と理解していますので」

「そうなの……?」

「私はアリスより長生きしていました故」

ハングさんハングさん、何遠い目をしているんですかー?

「いえ。冗談ではなく女性の諍いさかいは恐ろしいのですよ?」

「あははははっ!」

グリフォンとティーの口喧嘩の中に入って痛い目にもあったの?」

「いえいえいえ。本当に笑い事ではないんですよ。」

あの方たちは本当に恐ろしいのですよ!まさに攻撃的アクティブで!」

「あゝ。」

「アリス?」

「う、後……………」
「うしろ？」

「ハ〜ン〜グ〜？何を言っているのかしら〜？」
「さ〜いししょうさ〜ん？アリスにあたしたちの悪口ですか〜？」
「じよ、女王陛下……………グリフォン……………き、聞きました、か？」
「「ええ（うん）。ばつちり」「」

あ。ハングが顔面蒼白になってる…………

「わたくし達の報復は怖いわよ〜？」
「宰相さんにはちよ〜つと覚悟してもらおうかな？」

ティーはどこから出したか小さな両手鎌を持っていて
グリフォンは指をぽきぽき鳴らしている
どっちも笑ってるけど目が笑ってなくてとても怖いデス…………

「さ、て…………とグリフォン、いち、にの、で行くわよ？」
「はいはい。いきましょー」
「いち、にの、」

「ストップ！！！！！！」

わたしは大声を出してティーとグリフォンの前に立った。

「アリス、怪我をしたくなかったら退いてちょうだい」

「あのねえ！わたしの分からないことを教えてくれるって言ったくせに」

「ティーもグリフォンもさつきからなに忘れてんの！！」

「「あ。」」

「「うう・・・酷いよ」

「「ご、ごめん。うーん・・・悪乗りして遊びすぎたかな？」

「「あら。本気じゃなかったの？」

「まさか。同じ喧嘩するならハーヴかトゥリーとやったほうが楽しいよ」

「二人とも喧嘩好きですものね」

「あのーお二人さーん？」

「「あ。ごめんごめん」」

ダメだこの人たち・・・早く何とかしないと・・・

アリスが座って溜息をつくときティーとグリフォンも再び座りなおした

07幕 『不規則な時間へようこそ』 (後書き)

はい。だらだらとすいません。

次回ようやく真面目(?)にやりたいです。

>> 次回『不規則な時間へようこそ』

08幕 『変則な時間へようこそ』

「えーと？で、なんだっけ？」

「まずはえっと……ずっと気になってたんだけど」

「うん。」

「わたしとハングが来た時は『昼』だったよね？」

「はい。その通りです」

「で、グリフォンが起こされてお茶会が始まったのが『朝』だよ
ね？」

「うん。そうだね」

「それから、『夜』になったからってお茶会が終ったよね？」

「ええ。それが変かしら？」

「変でしょ！？昼から朝になったり朝から夜になったり！！」

「あら？それって普通じゃないの？」

女王はきよとんとして小首をかしげる

(うっカワイイ……！！)

「女王、アリス達の世界ではそれが『普通』じゃないんだよ」

「へへえ……そうなのアリス？」

「え？あ。うん。わたしの世界じゃ普通は『朝・昼・晩』って進
むの」

「アリスの世界ではそれが『普通』ですが私共の世界では違っ
てですよ」

「どんな風に？」

「そうでございますね……アリスが言った通り『変則的』な
んですよ」

「変……『昼・朝・昼』『朝・夜・昼』みたいなの？」

「ちよっと違うねー『夜・朝・昼』になったりもするし

同じ日に同じ時間帯じかんだいは来ないし。」

「……………」

「んーとねー、図に書いて説明するとー」

グリフォンはいつの間にもやら持っていたペンや紙にすらすらと文字を書いていく

「んーこんな感じかね？」

詳しい事は言うより書いたほうが分ると思うから

朝：約5時間

昼：約12時間

（内3時間は夕方）

夜：約7時間

全：約24時間

一日は朝昼夜によって

成り立っている

例)

昼 朝 夜 一日終了

続けて同じ時間帯は来ない

例)

× 昼 夜 夜

× 昼 昼 昼

「これでわかるかな？」

「んゝまあ。・・・何で夕方が昼に含まれるの？」

「さあ？ たったの3時間だからじゃない？」

「っていうか、コレで一日とか分るの？」

「日にちとか分からないけど大体でどうにかなるから」

「季節は？」

「一応ちゃんと変わるよ」

(どっち?)

「まあ、特に決まってるから同じ時間帯が続いたりしたら、

『あー。一日終わったんだー』な感覚でいいから」

「はあ。・・・。」

(イマイチ分かんない。・・・。)

「まゝ。時間帯はこの位でいいかー。」

「このままだったら言ってるると時間的にもきついし」

「へ？」

「んにゃ。なんでもない。」

「えと・・・で、アリス、後はどのような疑問が御座いますか？」

「ん。あの塔にいた時に赤と緑の斑まだらの森があったんだけど、あれ

って何なの？」

「え！アリス・・・あの塔にいたの?!」

いきなりグリフォンが顔を青くしていきおいよく立ち上がる。

その際に勢いよくイスが倒れて大きな音を立てる

「う・・・うん・・・。」

「それを知ってるのは!？」

「は、ハングとティーに・・・後、アンディングって人、ただだ
と思っけど・・・。」

血相を欠いて一体どうしたというのだろう
目も、おそろしいほどに鋭い……

「女王に宰相さん、それにディーン、ね……
何か、余計なものとか見た？」

「余計な、もの？」

「あ。いや……なんでもないよ

知っているのはあたし達だけなんだね？」

「う、うん」

「そう。じゃあ、塔そのの中にいた事は外でも中でももう口にしない
でね？」

女王も、宰相さんも……もちろん、アリスも」

そのとき目配せしたグリフォンは本当に怖かった

グリフォンの急変に戸惑いながらも頷き返したら

グリフォンはバツが悪そうに頭を掻いてから椅子を立てせて座
りなおした

「ご、ごめん。で、赤と緑の斑まだらな森だっけ？」

「うん。」

「……またあのいかれた変人ね。」

「誰？」

「最高にいかれた帽子を被っていて最高にいかれたお茶会を開い
ている

最高にいかれた最つつつ低な人がその森にいるのよ」

ティーは満面の笑みでにっこりと笑っているが言っているのは悪
口だ（しかも饒舌じょうじつ）

……その人に何か恨みでもあるのだろうか

「あの森にはドラックっていう人がいて二つ名は『いかれ帽子屋』」
「どついう訳か女王陛下と帽子屋様はずいぶんと仲が悪いのですよ……」

「へ、へえ……それってどついう人なの？」

（いかれ……？）

「会いに行けば分ると思うけど……」
「だめよアリス。あんないかれた人にわざわざ会いに行く必要なんてないわ」

「……と、まあ女王陛下がこうなのですよね」

「つまりはその帽子屋さんを根っから嫌ってるわけね」

「そ。でさ、そのドラックさんがあの斑模様まだらの森を作ってる

……って、あの人またやってんのか。オイ」

「私もアリスから聞いたときは驚きましたよ。」

「今度は何人犠牲いけにえになったの？」

「さあ？私にはわかり兼ねますね」

「何なの？あれ」

「アリスは、まあ、知らなくていいよ。むしろ知らないほうがいいや。」

「？」

「えつとねーそのドラックさんのトコには、

『三月ウサギ』のハーヴと『眠りネズミ』のヴェインがいるんだ」

「帽子屋さんに三月ウサギと眠りネズミ？」

コレは正に母が私が幼い頃に読んでくれた童話だ。

……物騒なのは女王様の筈だったんだけど、気にしないようにしよ

「あれ？ハーヴって？」

「そ。さっき話にぼつって出てきたでしょ？あたしのケンカ友達

なんだ〜」

「ヴェインって?」

「ヴェインはハーヴの双子の兄弟だよん」

「ええ。あの眠りネズミは最低でいかれた人のところにいるわりには、

随分カワイイ子だったわ〜」

「へえ〜」

その嫌いなドラクさんの所にいるからってその子の事は貶けなしたりはしないんだ・・・

ちよつと関心。

「でも三月ウサギの方はいかれた人の傍そばにいるせいかしら?」

それとも元の気性なのかしら? かなり野蠻やばんで下品よね」

「・・・」

感心した途端それが

「あーまあ〜・・・この国の人たちの事は任せてよ。

あたしは交流範囲こうりゅうはんいがすつごい広いんだよ」

「そうですね。国内の案内は全てグリフォンに任せるとしまして、他に何かありますか?」

「え。あたしが言ったことだけど国のこと全部押し付けられるのは流石にキツイよ?!」

「一度自分で言ったのなら最後までやりましょう?グリフォン」

「女王(陛下)が言えるセリフじゃない(です)」

「あら〜見事にハモツたわね〜」

「意外にグリフォンとハングって息と気が合うんだねー」

「そうよ この二人って意外と気が合ったりするのよ〜」

「そんな意外かな?ハングさん?」

きよと、とした顔で正面のハングに話を振って首を傾げる

「意外なのではないですか？」

「一見ただけでは私とグリフォンは正反対とは言いませんが対照的な印章がございますからね」

「へーそんなもんなのかね。……って言うか女王さ、今、微妙に話し逸らそうとしてなかった？」

「気のせいよ」

「……さて、嘘をおつきになった女王陛下には後でたっぷりと説教をして差し上げるとして、

アリス。他に何かございますか？」

さらりと笑顔で言っただけのけたハングにティーがピシリと固まった。

「お。女王が石になった。

（女王が固まったのひっさしぶりに見たなあ〜）

「貝じゃないの？」

「拗ねたわけじゃないからね。つまりは恐怖でかたま……」

今度はグリフォンが固まり、ギギギ……とハングのほうを向いたハングは変わらず、にこりと微笑んでいる

「？」

「どうかしましたか。グリフォン？」

「ま、まあ。それはどうでもいいとして……」

「どうしたの？」

「いいから！何も聞かずに質問して！！お願いだから！ハングさんに殺されちゃう……！！」

（怖い怖い怖い強い怖い怖い怖い……！！）

「・・・・・・・・・・は？」

殺す？

誰を。グリフォンを。

誰が。ハングが。

「?????」

「なんでもないですよ。ねえ？グリフォン？」

「・・・・・・・・・・!!!!!!」

グリフォンは真つ青になりながらコクコクコクと何度もうなずいていた

「さ、アリス。他に気になる所は？」

「え。あーえつと・・・ずっと気になってたんだけど、真実の番人つて会えるの？」

「え？真実ー？いつつも会ってるよね。ハングさん」

「全く持つて番人というありがたみの欠片もございませんね」

「酷い。あなたはなぜ私にそう辛辣？」

「へ？」

「あ。サアムさん！いらっしやうい」

「グリフォン・・・あなたは私に、食器洗いを、押し付けて・・・」

「・・・」

「あ、あはは、まあ、そっちのが先輩なんだから・・・ね？」

「ね？じゃない・・・！」

「・・・・・・・・・・おや？あなたは、アリス・・・。」

「へ？名前・・・言いましたっけ？」

言った覚えがまったく無い。
そもそもこの人とは初対面のはず。

「失礼。私はサアム。訳あって本名は、伏せます。二つ名は「トカゲ」」

「トカゲ……」

さつきハングとグリフォンが言っていた人？
前髪が隠れるほどに長い髪。

なんとなくカタコトに聞こえる言葉

ひよろりとした細い体

灰色の衣服

……中でも一番目が行くのが
腰のホルダーに納まった2本の包丁

（な、何で包丁？っていうかなんで台所じゃないのに持ってるの？しかも2本！！）

「あ。悪いですね。常に包丁を持っていないと、落ち着かないんで」

（そ、そんなもんなの！？）

「ええ。そんなもの。」

「ちよつと。サアムさん？何話してんの？話題が全然わかんないよ」

「サアム。独りでぶつぶつと気味悪いですよ。」

「聞かれた質問に、答えただけ。そして気味が悪いとは、酷い。」

「相手が声も出していないのに独りだけぶつぶつと喋って入れは十分気味が悪いですよ」

「だから、なぜあなたはそう、私に辛辣……」

「……？わたし声、出してなかった？」

「うん。」

「そっか・・・気づかなかった」

（（天然ッ?!））

（いやいやいやっ!?!そこは何で声を出さずに話せてたとかを疑問に持つところだよな?!）

そっちもだけど普通は声に出してないのに会話が成立してる方を疑問に持つよね!）

「こ、今回の。余所者は、天然、なのですか。」

「わ、私もそこをつっこまないと・・・予想外でした」

グリフォンは頭を抱えたり、サアムさんやハングわたしのほうを見て驚いたような顔をしていた

08幕 『変則な時間へようこそ』 (後書き)

・・・あれ？まさか5まで行っちゃいます？
せめて5で終わりにしたいですね・・・(；；ー)

サアム『トカゲ』

腰のホルダーに出刃包丁と柳刃包丁を挿している

深緑色の前髪が長く、両目を隠している(たまに片目が見える)

灰色の服装を好み、いつも着ているが、

ティーとハングに『汚いからやめなさい』といわれている

本人曰く『別に色以外は綺麗なんだからいいじゃないか』と、いう

次回、『女王空気』

・・・ではなく、

>>次回『余所者』

09幕 『余所者』

「そついえば……さつきから皆わたしの事を余所者つて言ってるけど、余所者つて珍しいの?」

「いえ?余所者自体は珍しくありませんよ?

現にそのグリフォンも元は余所者ですからね」

「そつなの?」

「ん?うん。そつだよ?あたしも元は余所者……」

……と言つてもあたしがココに来たのは随分小さい頃だからね。

余所者つて言つよりむしろココ出身つて言つ方がしっくりくるけどね」

グリフォンはあははくと、苦笑しながら頭を掻く

「アリス。余所者は、存在ではなく、『役』が重要なんです」

「やく…?」

「はい。」

サアムさんがちびちびと話してくれる

「『役』…私の場合は「トカゲ」彼、白ウサギのほうは「ハング」」

「サアム。私の名前と『役』が逆さになってます」

「スミマセン……間違えました」

「嘘です。わざとでしょう」

「本当です。……で、話の続きですが、いかれたお茶会の主催者、ドリンクが「いかれ帽子屋」

そのお茶会のメンバーが「三月ウサギ」のハーヴ。「眠りネズミ」のヴェイン、などです」

「はあ……」

何かソレが『役』に関係あるの？、と思っただけど、母の読んでくれた童話

「不思議の国のアリス……」

「……姿形、行動は違う。でも、『役』によつて『個人の価値は決まる』」

「個人の、価値……」

「そう。例えば、ハートの兵士。彼らは、いくら亡くなつても、問題は無い。

とても、数の多い役割だから……」

周りを見てみるとハートの城の兵士たちはみんな同じような服装、同じような顔をしていた。

赤いハートのマークの入った服を来た兵士達。

よく見てみるとクラブにダイヤ。スペードなどの服を来た兵士たちがいた

「彼らは『トランプの兵』」

「トランプの、兵……」

「いくらでも代えのきく存在だから、キングもどんどん首を刎ねているのよ」

後ろから明るい声とともに物騒な言葉が聞こえた

「あや。女王回復したんだ？」

「酷いわね！」

「こんにちは、女王。」

「……相変らず汚い色ねえ、不潔よ？サアム」

「別に。色以外は清潔だから、無問題。です」

「そういう問題じゃあないのー！！もう、これは女王の命令よ！？」

ティーはずびしっと、人差し指をサアムの鼻先に突きつける

サアムは依然して、のけぞりすらしめない

「では、ひとつ聞きます。」

「なによ」

「この私に、この灰色以外に何か、他の色が、似合うとでも？」

.....

「.....今回はやはり謝ります。申し訳ありません。サアム」

「、深緑なら似合いそうだけれど.....」

「そう？この人なら赤黒い色が似合うと思ったんだけど？」

「.....分かり切った事、ですから。グリフォン。」

私は、あなたの色彩感覚なんてあてには、してません、」

グリフォンにさりげなく貶されているようにも聞こえるのだが、無視しているのか気づいていないのか.....

そしてサアム自身もさらりとグリフォンに暴言を吐いている

「あはは、嫌だなあサアムさん！自分に赤が似合っつてわかってるんでしょ？」

いつでも言っつてね？いつでもこのあたしがサアムさんを血化粧で染めてあげるから」

「そうですね。しかし、私はやられるより、やる方が、好きなので。」

「.....ふうん.....」

グリフォンはにっこりと笑っているが額には青筋が浮かんでいる
対するサムさんは、にっこりと笑っていて特に変わった反応をし
ない

「アリス、余所者と役のことですが、
「あ。うん。」

ハングは、他の三人を見事に無視して話を続けた。（ハングってス
ルースキル高い……？）

「この国の人間はほとんど余所者なのです。

彼らは、あちらの世界で何らかの理由があり、この国へと墮ちて
きているのです」

「ハング、も？」

「ええ。私も。」

「……………帰れるの？」

「強く。心の底から願えば。」

「心の、底？」

「一片の迷いもなく。『かえりたい』と……………願えられれば」

ぞくり

目を細め、微笑みながら言うハングにわたしは体中に寒気と恐怖が
走った。

（こわ、い……………）

怖い怖い怖いコワイコワイ……………！

思わず目を逸らしたくなる。

すぐにこの場から走って逃げたくなった。
でも目が逸らせなかった
足が動かなかった

しばらく時間が止まったような気がした。

そして…

「ア〜リ〜ス〜ッ!!!」

「ぐはっ?!」

「アリス!？」

突然ティーが背中にタツクルしてきてべしゃっと、効果音がつきそ
うな勢いで

わたしはティーもろとも倒れてしまった

「ちよつと女王?!アリス、大丈夫!？」

「大丈夫、じゃ、無い、……………」

「ハング、前にいたあなたが支えれば、よかったのに。」

グリフォンは駆け寄ってきてティーをわたしから剥がそうとして、
サラムさんは顔を顰めて（見えないけど）ティーとハングを交互に
見比べる

「申し訳ございません。空気を読めない女王陛下の行動など測定で
きないもので。」

アリスを庇う事は疎か、女王陛下をアリスから引き剥がすことすら
できませんでした。」

「宰相さん。言い訳になつてないし、ちゃっかりと女王を貶してない?」

「そうよハング!不敬罪で首を狩ってしまったてもいいの!？」

「……まあ、わたくしとしては美しいコレクションがもうひとつ増えて嬉しいのだけれどね」

「……………聞こえない。」

何かその可愛い顔から出た言葉はわたしに聞こえなかった。むしろ聞きたくない……

「……つと、女王陛下。そろそろ職務に戻りましょう」

「えいいやよあ!わたくしはまだアリスと遊びたりないわ!」

「同じところに住んでいるのですから、いつでも遊ぶことはできるでしょう。」

「仕事もいつでもできるわ!」

「いつもそう言われ、書類が溜まりに溜まっていつもいつも苦勞なされるのは女王陛下なのですけど。」

ふう、とため息をつきながらも少し嬉しそうな顔をしているのは気のせいでしょう。

気のせいと思いたい。

「仕方ありませんね。すべての書類は陛下に「やるっ。やるわ!」

「……………」

「キングに苦勞なんてかけてはいけないわ!」

「そうねえ……裁判はすべて死刑よ!後は根性よ根性!」

そう言つて走つて謁見室から飛び出すティーと、そのティーにハングはため息をつきながら

歩いてティーに着いていく

「これで、よし。と。」

「……………ねえ、サムさん。今更だけどさ。」

「はい？」

「何であんたまでついて来てるんですか？」

「見張り、です」

「見張りイ？」

「まだ、あなたの仕事があるので、この後、帽子屋に行かないように。」

「でーっ！信用されていないなあ、あたし。」

「日々の行いのせい、です」

「日々の行い……………ってまだ10回しかサボった事ないでしょうか！」

「10回もやれば、十分です」

「……………それって、洒落？」

「違う。」

「まあ、ここで騒がしくするのもなんだし、出ようか」

「……………」

>>>>>

グリフォンとサムは、アリスを寝かしつけた客室から出て、厨房へ行く廊下を歩いた

「耐性についても、この子にはあたし達みたいにはなってほしくないねえ」

「気に入りましたか？」

「あたしはね。でもまあ、『アリス』だし。」

「彼女が『アリス』とは、私達は運が、いいのでしょうか」

「可愛い子でよかったなあ〜アレならドラंकさんもきつと気に入るね」

「殺戮狂の所へ連れて行く気、で？」

「大丈夫だよ。殺戮狂でも気に入られればいい人だから。」

「……………理解、できない」

「殺人鬼じゃない人には理解できなくていいのっ」

「あなたは違うでしょうに。」

「あ。そっか。」

「ま、あの子はドラंकさんに気に入られるって確信があるからだ
いじょーぶっ!」

「どこからその、確信が……………」

「まあまあ、仕事でしょ？早く片付けよ？」

「はいはい。今回も確実に頼みます。」

「仕事は確実に手早く、ね！」

「ええ。」

「よーし！やる気出てきたあ！！今日の分をさっさと片付けるよー

!」

「あなたは、乗るまでが遅すぎる。」

片腕を突き上げるグリフォンにサームは持っていたレシピか何かの紙を手渡した。

「いいのいいの！さあて、キリキリ行きますかあ〜!!」

09幕 『余所者』（後書き）

ギャグが書きたいです……

なぜシリアスチックに……

グリフォンはお気に入りのキャラなのでこれから先も出張の可能性が高いです。

明るくハキハキした子って扱い易いんです

ハングさんにちょっとSっ気が見えたのは気のせい……じゃないです。きつと。

>>次回『いかれたお茶会へようこそ』

10幕 『いかれたお茶会へようこそ』【】

「どうデス？ワタシが入れた紅茶は」

「いやあくさつすがドリンクさん！おいしいよ。ね、アリス！」

「う、うん……。」

「ソレは良かった。彼女が作ったもの以外にもお茶菓子がアルのでどうぞ」

「ど……どうも……。」

な、何なの？この状況……

どうしてこんな状況になったんだっけ……？

少し思い返してみよう。うん。

■■■■■■

あれから、何回も夜やら昼やら朝やらが来て、

流石にヘンテコな時間の進み方に慣れてきた頃、ハートの城の用人の人達とも仲良くなっていて、

ハングやティーとはため口と言うか、少しは砕けて話せるようになった

ちなみにこの後グリフォンの仕事が終わったら一緒に遊ぶことになっている。

「こんにちは、アリス。」

「あ、ハング」

「この城での生活には慣れましたか？」

「うん。兵士の人もメイドさんも優しいし。ハングは？仕事？」

「そうですね。ならよかったです。」

ええ。私はこれから書類を女王陛下の下へ、持っていく所です」

……やっぱ笑うと綺麗だなあ……

「アリス？」

「え、あ！な、なに？」

「い、いえ……なにやらぼうつとしていたようなので風邪でしょうか？」

「うつん。なんでもないよ」

「そう、ですか？無理はしない方がいいですよ？」

「ん。平気だつて」

「ですが……」

ハングは確かに気が回って良い人なんだけど……
ちよつと下手に回りながらも強く押してくるところが少し困り物・

……

「アリス〜！」

「グリフォン」

「仕事終わったから遊びに行こつ！」

城の中には長い間いるけどまだ外にでてないでしょ？」

「う、うん。」

「ほらほら、宰相さんは女王の世話があるでしょ？」

「世話……つて」

「私は女王陛下を見張り兼補佐、ですから」

ハングは苦笑してるけど、実際と苦笑で済む問題じゃないと思う。
そこを苦笑だけで済ますなんて……

・・・・・・・・・・・・・・・・後ろから物騒な言葉が聞こえたのは気のせいでしょうか？

気のせいだよな？

気のせいって言って・・・・！

「はっ、なめないでよ宰相さん？人ひとり守れないグリフォンさんじゃないよ?!」

そう言つて隣（頭上?）からチャキ、と音がしたと思つてグリフォンを見たら、

ナイフを指の間に挟んで、なんちゃって鉤爪を作っていた

【ここに住んで分かつた事1・この人たちは平気で凶器を持ち歩いている】

>>>>>

ハートの城を出て森に入った頃、ようやくアリスは腕を離してもらった

どこに向かっているかは知らないけど、

未だ先程のナイフをいじりながら歩いているグリフォンの隣を歩く

「グ、グリフォン・・・?いつもそんなの持ってるの?」

「ん?これだけじゃないよ?もつといっぱい持ってるけど、見る?」

「お城に・・・・だよ、ね?」

流石に今ももつと刃物を持つてるってことはないよね?

「うん?城にもあるけど今も持つてるよ?護身用の武器があればあ

る程いい！」

グリフォンはそう言ってナイフやら小刀やら刃物をバラバラとあちこちから取り出す

「アリスもひとつくらい持つとく？あると便利だよ？」

「い、いらないうらない！！！！そんなの、持っても使えないし！」

「そ？残念。」

肩を竦めるグリフォンにアリスはごめんね、とだけ言って冷や汗を掻きながらも苦笑する

(あれ？)

「アリス、どうしたん？」

「ん．．．．．なんか、鉄臭くない？」

「あー確かに。」

もう嗅ぎなれた匂いだから気にならなかったよ

「へえ〜？」

ひゃっ．．．．．？！」

「アリス!？」

「グ、グリフォン．．．．．ち、血が．．．．」

アリスが見たのは、屍の山、とは行かないが、死体や人間の一部分が散乱している血の海状態だった

グリフォンは慌ててアリスの前にたつて見えないように目を覆うが、遅かった

アリスは、目を見開いて信じられない光景を見たように地面に座り込む

「ごめんアリス。タイミングが悪かったね」
「あ、あああ、あ……」
「わっわ?!アリス!!!」

普段見る事のない光景を見せられて気絶してしまったらしいアリスをグリフォンは
慌てて血で汚れていない木に寄りかからせてため息をついた

「……………くおらあ!出て来いドリンク!!!」

グリフォンがそう叫んだ後、
暫くして草むらからガサガサと帽子を被り、奇抜な格好をした青年が出てきた。

「おやア?誰かと思ったらグリフォンサンでしたか
どうしましたタ?随分後立腹のようですガ?」

「そりゃそうだよ!今日はあんたのどこ行っかって言ってたでしょー
が!」

「おや?ソウでしたっけ?」
「そうだよ。一昨日と今日で一通ずつちゃんと兵士にもた、せ……
て……」

ああああああああああ!!!!!!!!!!」

「?」
「ちょ、ちょ!ドリンクさん?!その死んでる人ウチの兵士じゃ
ん!!!」

「エ。エエソウですよオ?てつきり女王カラの刺客かと。」

そこに横たわっている死体を指差して青褪めるグリフォンとは対
照的に、

ドリンクと呼ばれた彼はいつそ清々しい程あっけらかんとしていた

「ねえ、一昨日もウチの兵士来た？」

「？エ〜エ。すっかりと始末しましたケドねエ〜」

「あ〜．．．．．ドリンクさあん。それ、あたしが手紙持たせた兵士だ」

「おやおヤア．．．．それは残念でシタ」

「反省してよ．．．．それは無差別殺人をどうにか．．．．いや。もう遅いよね。うん」

「酷いですねエ〜マア、事実だからナントも言えませんが。

ソレより、ソコの少女は誰デ？殺してしまっても」

「いい訳あるかあ！！！！！！！」

グリフォンはドリンクに蹴りを繰り返すが、見事にかわされる体を捻ってもう一発繰り出すがまたかわされる

「チッ！

．．．．．もういいや。とりあえずこの子をドリンクさんのところに運ぶからね。」

「ハイハイ。」

>>>>>

．．．．．あれ？

「じじい、なに？」

気づくとわたしは見も知らない部屋の中において、寝かされていた。

「おじぎの、夢っ。」

血塗れで、バラバラで、一面真っ赤で、真っ黒で、緑が赤で・・・
夢にしてもやけに実際にあつた出来事のようにリアルだった。
とても恐ろしい光景。

夢とはいえ思い出したら背筋がぞつとしてきた

がたんっ

「ひゃああつ?!」

「あ。アリス!起きた?」

「グリフォン・・・?」

「ああ。よかつた!ここについた途端倒れちゃうから、心配したよ。

だつて余所者はあたし達より脆いつて聞いたから、もう目え醒めな
いかと思つた・・・」

グリフォンが窓から入ってきて、わたしの寝ているベットまで駆
け寄つて突つ伏す

それだけで随分心配をかけてしまったのだと分る

(何故窓から入ってきたのかはつっこまないで置こう)

「ありがと。心配かけて、ごめん。」

「ううん。いいって」

「あの・・・ここって、どこなの?」

「ああ。ドラंकさんの家って言えばいいのかな?」

「ドラंकさん?」

「ん。ドラंकさんって言うのは・・・」

「アア。起きましたか?」

訳がわからず混乱している所に知らない名前が飛び出してきて、さらに奇抜な帽子を被った人がドアあたりからヒョコツと顔を出す

「これがドラंकさん。」

「コレ、とは酷いですネエ」

初めまして。ワタシは「いかれ帽子屋」ことドラंक、とイイます」

その人は少し不自然な話し方とともにクツクツと笑い、こちらの方を向いて一礼をしてアリスを見る

帽子屋帽子屋……申しや？（違

帽子屋ってティーが嫌いって言ってた人？

悪い人には見えないけど……

ちよつと服とか趣味が変わっばいけど。

気づいたら帽子屋さんがじつとわたしの事を見ていた

「え。あ、アリス＝リデルといますっ」

「エエ。アナタの事は彼女から聞いてマスよ」

「グリフォン？」

「ハイ。彼女には随分鼻屑にして頂いてマスねエ」

「あたしは遊び来てるだけなんだけどね」

「マア、ソレはソレでソレとしマシて、準備はしてあるのでお茶会にしまシヨウか」

「いきなり?!」

と、どうかそれはそれでそれとするって、どれがどれでどれとど……こんがらがってきた。

「グリフォンサンもお茶菓子を持って来てくれた事デスし、ネエ？」

「え。グリフォンお菓子なんて持って来てたの？」

「ん？うん。ほら」

そう言っただけでグリフォンは手に持っていたバスケットを掲げた

「どこにもってたの・・・？」

「ん？・・・四次元ポケット？」

「四次元ポケット！？」

「まあまあまあ、それは置いて外に出ようか。」

「????？」

「ほらほら早く。」

■■■■■■■■

・・・で、なんやかんやあつて冒

頭に戻るのだった。

「そっぴやあさ、ハーヴとヴェインは？」

「サア？大方マタ森の中で迷子になってるんじゃないデスか？」

「うわーありえそっぴやでこわいな・・・」

「デシヨウ？」

「うんうん。」

・・・あれ？

「オヤ？アリス、カップがカラですよ？」

「オカワリはいりマスか？」

「あ。もらいます」

「ドラクさん、あたしにもちようだい」

「ハイハイ」

「ねえねえ、グリフォン。」

「アリス？」

「・・・・・・・・・・あはは」

「「？」」

「あはははははははっ！あはははっ！！

おもしろーい！2人とも面白いよ！！」

「・・・・・・・・・・」

グリフォンはドリンクとお互いを見た後にアリスのほうを見て、ぼつりと言った

「笑った。アリスが、笑った・・・・・・・・！」

「ひ、ひどっ・・・・・・・・！わたしだって笑うって！！」

「あはは。ご、ごめんごめん！

仏頂面とはいかないけど城つつーか、この国に来てから笑い顔見えないからねえ」

「・・・・・・・・・・そう？」

「うん」

そうかなあ？と考えているときになりふつと暗くなった

「な、なに?!」

「アー。夜になったんですネエ」

「てかアリスさ、外に出てないとはいえ何回か時間帯かわるの見たことあるんだから、

そんな驚くこたないっしょ」

「ご、ごめ・・・・・・・・」

「まあマア。夜間の中でのお茶会もまた一興デスが中に入るとしまシヨウ」

「そだね。アリスー次、朝か昼になったら帰る？」

「え。うん。グリフォンがいいならいいよ？」

「オヤ？もう帰ってしまうのデスか？寂しいですネエ〜・・・」

「明るくなったら、だよ。少なくとも夜のうちはいるっての」

「フム。ソウですか？」

てつきりワタシはグリフォンサンがアリスを夜道に連れて行き怪談話デモするものカト・・・」

「あたしはどんないじめっ子であっ！！！！！！！！？」

グリフォンは額に青筋を浮かべて蹴りを繰り返し、小型ナイフを投げるが

ドリンクは楽しそうにクツクツと笑いながら悠々と避ける

「避けるなあ！！！」

「イヤですヨオ〜避けなきゃあたるでシヨウ？」

「当然だ！こちらら当てる為にやってんだよ！！！」

「オオ〜こわいコワイ」

「ンにやるっ！」

ナイフを投げて、それを避けてのエンドレスをお茶会用のイスに座って眺めていた

「アリス〜勝手に家の中に入っててイイですヨオ〜？コチラはシバラク終わりソウに無いのでネエ〜」

「あ。は、はい」

もう少しだけあの面白いやり取りを見てみたいって言う気もするんだけどなあ・・・

アリスは言われたままに2人を置いて帽子屋屋敷(?)に入ってしまった

＝
＝
＝
＝
＝
＝

ひとりに住むには不自由しないのか？と思うほど大きくて広い屋敷だった

改めて屋敷の中を見回してみると帽子、帽子、帽子だらけだった。

「さ、さすが帽子屋さん……………」

帽子屋さんということは帽子を作って生計を立ててるの？

……………帽子って儲かるの？

「あふ……………眠くなってきた……………」

10幕 『いかれたお茶会へようこそ』【】（後書き）

ぐだぐだ（？）全開です

ドランクとグリフォンはいじりいじられるな関係です

ドランク いかれ帽子屋

奇抜な帽子を被り乗馬服と燕尾服を合わせたような服装

少し狂ったような死んだような目をしている

言葉の所々にカタカナが入っていてかなり不自然な発音をする

グリフォンをよくからかって攻撃されるが、

本人は気にせず軽がると受け流している

ひとりで住むには大きすぎる屋敷に住んでいる

（現在、アリス視点の記録です）

11幕 『不法侵入』（前書き）

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ようやく更新したいと思います> | | (| (<

11幕 『不法侵入』

「あらあら。アリスったら、こんなところで居眠りして。」

「あ。姉さ……………」

「おはよう、アリス」

「お、おはよう……………」

あれ？わたしは兎を追いかけて、穴に落ちて……………
おもちゃの国についたはずなのに。

「帰ってきた……………」

「アリス？」

突然の出来事に困惑する私に姉さんは小首を傾げて不思議そうに「大丈夫？」と聞いて来る

「う、ううん！なんでもない！！」

姉さん、父さんの用事は終わったの？」

「お父様？お父様には呼ばれていないわよ？」

「あれ？おかしいな…確かに寝る前にイーディスが姉さんを呼んで……………」

「ふふ、寝ぼけているのね？」

こんな所で寝てはだめよ？風邪をひいてしまうわ」

「ごめん。ぽかぽか気持ちよくてつい……………」

「まあ、ふふふ」

「それよりも、何を読んでいるの？」

「これ？あなたは覚えているかしら？」

ほら、小さいときにお母様がよく読んでくれた本よ」

姉さんが本を閉じて、表紙を見せてくる

「うーん……」

「お母様は余程この本が好きだったのね。」

「なんで？」

「私も、アリスも、イーディスも皆、この本に出た人たちの名前だもの」

「うん。」

「お母様は、貴方とイーディスが生まれてくるって分かっていたのかしら？」

「なんで？」

「だって、お母様が本当にこのお話が好きのなら、一番初めに生まれたわたしに主人公の名前をつけるでしょう？」

「そうなの……かな？」

「そうだとおもうわ。よかったわね、アリス？」

「姉さん……？」

「本当に。よかったわね」

「姉………さん？」

突然に周りの風景が歪んで、滲んで来た

大好きよ、アリス

（姉さん？姉さん？）

段々と、姉さんまで歪み、滲んできた

アリスなんて、大嫌い

(姉さん!!)

そして、まっくらになった

.....ス

ア.....ス

アリス?

「んう？」

起きなよ

「.....?」

「おーきーなっ、て、ばっ！」

「うひゃあ?!」

どすん

.....痛い

えー...、今起こった事をありのまま話しますと、わたしが寝ていた
(らしい)

目を開けると逆さまになったグリフォンの顔があった

「グリ、フォン？」

「やっ。起きたね？」

…違った。逆さまなのはわたしの方だった。

「……ベッドから落とされれば誰でも起きると思うんだ」

グリフォンは逆さまで睨むわたしを正位置に戻して立たせる

「はっはっはっ。

大丈夫。あたしがいつもやられてる事だし」

「えー………」

「あ。でも女王はこれでも起きないらしいよ。むしろ自分から落ちてるって」

「ティー……。……？」

「……いやいやいや。ティーって女王様だよな？」

「ん？だよ？」

「うわーそれでいいんだ……」

「いいのいいの。」

寝相の悪い女王様………うわあ、何かシユール……

「あ。そういえば、グリフォン。

何でわたしを起こしたの？」

「あ。そうそう、もう昼になったから帰る」

「え?! もうそんな時間?!」

「アリスく? こっちとあっちの時間は違うんだよー?」

「あ。」

「はは、まあ。帰ろうか」

「う、うん……?」

あれ、ドラックさんは?」

「あーあの人?」

………仕留められなかった………!」

「いやいや。そうじゃなくて。」

「ん？ああ。あの人は適当に屋敷の中をうろついてるんじゃない？」

「ふーん。……………」

「アリス…？」

「グ、グリフォン……………」

「ん、ん？ど、どした？」

「お手洗いつて、どこ…？」

「え”。お手洗いつてWCと書いてトイレって読むアレ？」

「そ、そう……………」

「よく覚えてないけど確かあつちだったはず」

「ありがと！すぐ戻って来るから！！」

わたしはグリフォンの返事を待たずに早歩きでグリフォンが指差した方向へと歩きだした

「あー、行っちゃった……………」

ドリンクさんはいいとして、あいつらに見つかったらどうすんの全く……………」

グリフォンは苦笑しながらすでに視界から離れたアリスを追いかけに行った

■■■■■■■■

同時刻、帽子屋の屋敷近くの森の茂みからあちこち擦り切れ、ボロボロの服を着た二人の少年が息を切らしながら出て来た

「っはあ……………ヒデエ目にあつた…！」

「……………何も考えないで熊の子供を追いかけるから……………」

「だってよ？誰があんなところで親熊が出て来ると思うよ？」

「…普通、想像できると思う…それに、逃げ切れたと思ったら道に迷うし…」

「だから、お前は来なくていいつつたろ？」

「…ボクは一人で帰れないし、帰れたとしてもボク達は二度と会えないと思うんだあ…」

「……………！お前はそんなにオ「あー」……………どうした？」

「ドラंकさんの屋敷、女の子がいる…」

「グリフォンじゃねえか？」

「…グリフォンなら解るよー…」

「じゃあ、誰だ？」

「…行ってみるー……………？」

「だな」

>>>>>

■■■■■■■

「ふう……………」

適当に早歩きで探してたけど見つかってよかった…

…というか、大きい屋敷のトイレって何となく想像できないけど広いんだ……………

「えっと、出口ってどっちだっけ？」

とりあえず、上にさえ行かなきゃ迷う事はないよね？

……………ドラंकさん、ホントにこんな広いところに一人で住んでるのかな？

「おい」

出口を探そうと歩こうとした時、不意に後ろから声がかかった

「？……………！？」

ふりかえると、そこにはわたしより二、三歳あたり年下に見えるツンツン髪の少年とふわふわ髪の少年が二人、立っていた

…服がボロボロなのは気になるけど。

重要なのはそこじゃない。

問題はわたしに声を掛けた方の少年が肩に担いでいたもの。
少年は自分の肩まであろう、大鎌を肩に担いでいた

「あんだ、何でこんなとこにいるんだ？」

「…迷子ー？」

「ま。迷子にしろ、そうでないにしろ、こりゃあ立派な不法侵入だよな？」

ツンツン髪の少年はニイイ、と口角を上げて大鎌を構えた

「え、え、ええ？！」

不法侵入って言うなら君達はどうなの？！
ここドラククさんの家だよな？！！

って叫びたい！

11幕 『不法侵入』 (後書き)

なぞ(?)の二人登場。

12幕 『三月ウサギと眠りネズミ』

「不法侵入者は殺して良いんだよな？ヴェイン？」

「……うん。… 本当に、不法侵入なら。」

「なら、問題無しだ、なっ！」

「うわああっ！」

「避けんなよ、つとお！」

「嫌に決まってるでしょ!？」

わたしは少年達に背を向けて走り出す

「あっ!？おいコラ、逃げんな!！」

「殺されるって分かってるのに逃げない人はいない！」

「自殺志願者は逃げねえよ!！」

「わたし自殺志願者じゃないから!！」

「おら、よおっ!！」

「ひあっ!！」

「ハーヴ、外しっ放し〜…」

「こいつがうるちよろすんだよっ!！」

「わあっ?!!」

え？ちよ？『ハーヴ』？いま『ハーヴ』って言った？

じゃあこの二人が例のグリフォンの喧嘩友達？!

グリフォン、こんなのと喧嘩して生きてるの?!!!

「あ……………!！」

なんて考えてたら壁にあたる。

ちよちよちよ?! 何で家の中に部屋への扉でも何でもなくただの壁があるの?!

前と左と右は壁、後ろはグリフォンの喧嘩友達(仮)だし。

前後左右逃げ場無し?!!

わたしは慌てて後ろを振り返る。

当然と言っべきか。彼らはわたしから何メートルか離れたところで立ち止まっていた

わたしは壁に背中をへばりつける

「おー。行き止まりか」

「…大丈夫、かなあ?」

「大丈夫だろ。どうせ不法侵入者だ」

「…っ!」

「ま、せめて即死にしてやるか」

「…ドランクさんみたいにしたらお掃除、大変だもんねえ……………」

「イヤァ〜ワルかったデスねエ〜。アレはワタシの趣味なのデスよ
オ」

「……………は?」

「……………?」

グリフォンの喧嘩友達(仮)の後ろから片言のような言葉が聞こえる
彼らはガバツと後ろを振り返る

「コンニチハ。ハーヴ君、ヴェイン君? 久方振りデスねエ?」

「…ただいまー！」

「ハイ。お帰りなさい」

「な、なんで……」

「オヤア？ソレはワタシのセリフですよオ？」

帰って来たと思ったならこんなトコロで遊んでますシねエ？

アア。イエイエ、遊ぶのがワルいわけではナイのデスよオ？

ムシロ少年期のキミ達には必要な事と言えるでシヨウねエ。

デスが、今回は遊ぶべき相手を間違えたと言っても過言ではないデスねエ？

今日はグリフォンではナク、ワタシと遊びまシヨウかア？」

す、すごい饒舌だ……

「ド、ドラंकさん…怒ってる、っスか…？」

「ハイ？怒る？ワタシが？ナゼ？」

「怒ってます、よね？」

怒ってる………のか？

顔は笑ってるけど、なんか、ナイフ持ってるし…

「…ドラंकさん、怒ってるねえ…」

「うわっ！いつの間に?!」

いつの間にか隣りにいたグリフォンの喧嘩友達（仮）にわたしは慌てて距離をとる

彼はそれを何と思ったのか、のんびりとした口調で言った

「あー。ボク、眠りネズミのヴェイン……よろしく……」

よ、よろしくできないよ!!殺されかけたのによろしくなんて無理

！！

「えーと……、あっちにいる帽子の人は、ボク達の恩人のー、ドラク……さん」

知ってます。……恩人？

「で、そのドラクさんに押されてるのがー、三月ウサギのハーヴ……ボクのー、兄弟？」

はい。グリフォンの喧嘩友達確定。

「……キミは？」

「え。あ、アリス……」

て、何で言うわたし？！

「そっかあ……よろしくね？アリス……」

グリフォンの喧嘩友達（確定）は、ほわあ、と笑う

（かつ、かわ……っ！！）

……ハッ！！

だ、騙されちゃダメだ！

この人達はわたしを殺そうとしたんだから！

「……アリス？」

でも、、カワイイ……

でも、よろしくしたくない……

「アリス……？」

うっ？！それは反則……っ

反則だよグリフォンの喧嘩友達（確定）……！！

『うわああっ！！』

『安心してください、じっくりねっとり折檻してあげまシヨウ』

『安心できねえー！！？』

『我俣デスねエ』

『ワガママとは違うと思うっス！！』

声が聞こえて来てそっちの方を見てみたらそんな会話がされていた

「うわーさっきのわたしみたい」

「ねー」

すみません。グリフォンの喧嘩友達（確定）

可愛く癒しな声と表情で言われても今の『ねー』は納得しかねます
！！！！

わたしはあなたに殺されかけた者です！！

「……………」

「な、なに……………」

グリフォンの喧嘩友達（確定）はじゅっとなたしの顔を見る

「んー……ドリンクさんが、怒ったからーもう、ボクは襲わない、よ?」

「?」

「…キミは、ハーヴがキミを襲ったから、ボクを警戒しているんでしよう?…?」

ぎく……………

…?いやいやいやいや。キミもわたしを追って来てなかったっけ?

「…ボクは『本当に不法侵入なら』って、言ったんだよ〜だから、ボクは、悪くない、んだあ〜」

「屁理屈だ!…!…!」

何か今までの中で一番聞き捨てならない一言だ!!

「あ〜。」

「なに?!」

「今、声ーはつきりと聞こえた〜」

グリフォンの喧嘩友達（確定）はまたもやほわあ、と笑った

（うわうわうわうわうわ……………無理!もうダメ!ムリ……………!）

「はわわ〜っ」

……………ヤバい。

つい抱き締めちゃった。

どうしよう。

こっから先、どうしよう。

グリフォンの喧嘩友達（確定）は驚いた様な声を出したけどおとな

しくわたしの腕の中にいるし。

「あはは〜やってるねえ？」

………はい？

『上から』声が聞こえた。
天井の辺りから。

上を見上げると排気口からグリフォンがひょっこりと上半身だけ逆さまになっていた

「やつ！アリス」

………今度はわたしの見間違いじゃない。
確かにグリフォンは逆さまになっている

「…なんで排気口からぶら下がってるの？」

「いやあ〜久々だねえヴェイン」

「スルー?!?!」

「ひさし、ぶり〜」

「お〜。久しぶり〜元気してた？」

「う〜ん、とねえ〜…元気なんだけど〜、ハーヴのせいであつと危うかったなあ〜…」

え。ちよ、人を無視してなに友達を殺しそうになってた人と話してんの?!

………あ。グリフォンわたしが殺されかけたの知らないんだ。

「はあ〜そりゃ大変だったね？」

「イイ！」

「は、はいい……？」

「いいねアリス！これはあれだね？アリスの知れざる一面？つていうの？イヤイヤ、なんとも面白い」

……え、えーと……つまり、呆れられてもなく、引かれてもなく、

……えと、面白がられてる？

……それはそれでなんか嫌だな……。

いや。贅沢って分かってるけど。

……むしろさ？おとなしい女の子（自分で言うか）のあんな一面を見て笑い飛ばせるグリフォンは凄いなと思うんだ

……あれ？逆さまになっててあそこまで笑えるグリフォンの腹筋って鋼鉄？！

そんなことを考えていると、グリフォンの喧嘩友達（確（まだやるか）……以下ヴェイン）はこちらをじーっと見ていた

「アリス、急に大声を出すと、ビックリするから、おっきな声を出す時は、教え、てね？」

「そうさしていただきます！」

ダメだ！この上目遣いには逆らえないっ！！

わたしは思わず腕の中にいたヴェインを抱き締める腕の力を強くした

「はわわわわ〜」

『あーあいつ、ヴェインに何しやがる！！』

『ナニって、抱き締めてマスねエ』
『分かってんなら行かせてくださいっ！オレのヴェインが……！』
『ヴェイン君はキミのじゃナイでシヨウ……』
『大丈夫っス！ヴェインはオレを必要としてるからオレのヴェインでいいんス……！』
『メチャクチャですねエ……』
アンマリ弟にベツタリだと煙たがれマスよオ？』
『う………っ！』

………うわー………

あのツンツン髪の少年ってブラコン……？初めて間近（？）で見た！

「はあ〜っ！ハーヴも相変わらずブラコン全開だねえ！？」

「………助かるけど、正直ちよつと困る、んだよねえ〜」

「だろっうなあ」

はは、とグリフォンは苦笑してヴェインは少しだけ顔を顰めている

「……ボクは、アリスの方がいいやあ〜」

「ほあ？！」

「お。ヴェイン、アリスを気に入った？」

「うん〜ダイスキ〜」

可愛くてー小っちゃくてーほわほわしてるー」

ちよ、ソレまさにキミのこと……

すっごいカワイイしわたしの腕に収まる程の背（わたしと同じくらい？）だし。

なんか一緒にいると和むし

なによりカワイイし……！！

「後、落ち着きのないところはハーヴにそっくりだけどーそもそも、いいなあ」

「同じ落ち着きがないのでも暑苦しい少年とカワイイ女の子とじゃ印象違うしね」

「ねえ」

「オイこらグリフォン！

誰が暑苦しいって？誰が」

「キミに決まってイルでシヨウ。そもそも、話しながらワタシと殺りあうなんテ余裕デスねエ？」

「その通りだよ、暑苦しい熱血のブラコンハーヴ君。そしてドラंकさんに失礼だから集中しろ。」

「なんか酷え評価が聞こえた！！」

「間違った評価ではナイですネエ」

「ドラंकさんも酷え！

しかも空耳じゃなきゃ何か命令された！？」

「アリス、グリフォン…ここから離れて外に行かない…？」

ドラंकさんとやりあっている兄弟はどうでもいいと言う様にヴェインは言い出した

「ん？そうだね。アリス、戻ろっか」

「え。この二人放っておいていいの？」

「いいのいいの。平気平気。」

「そもそもこっって行き止まりだからこの二人をどうにかしないと出れないよ？」

「…その為の排気口」

「へ。」

「行き止まりに見せかけて、実は上から逃げられるんだよ。」
「排気口という名の脱出口ー」

.....

排気口って、その為にあるものだけ？
何か使い方が色々違うの？

「さ。行くよ。ほら、アリス捕まって」
「はやく〜」

はっ！
ヴェインももう登ってるし！

「ほいっと」
「うひゃあっ！」
「アリス〜どうせ叫ぶなら『きゃあ』とかもつちよっとなんか可愛らしいのをきぼん……」
「嫌だよ！」
「ちっ」

グリフォンはわたしになにを求めているの？！

>>>>>

■■■■■■■■

「っ、疲れた……！」

「うわ、体力ないなあ。アリス」

「うん〜」

「うるさいなあ！匍匐前進なんて慣れてないんだもん！！むしろ慣
れてる方がある意味凄いや！」

「あたしはサアムさんや宰相さんから逃げる為によくやってるんだ
けど…？」

逃げるって、グリフォンサンはなにか悪いことでもしてるのでしょ
うかつ？！

「ボクも蜂とか、熊とか、禿鷹はげたかから逃げる為によくやってるなあ」

ヴェインは匍匐ほふく前進を『よくやる』ほどサバイバルな環境にいるの
っ？！

も、だめ…何かこの人達ツツコミが追いつかない……

そして常日頃そんなことになってるあなた達と一緒にしないで！！

ガーデン用の椅子にぐったりと寄り掛かっていると、またフツと周
りが暗くなった

「またあ？！」

「ふはあー。今回は昼が短かったかー」

「…さつきも一度夜が来たから、『次の日』になっただねえー」

「だねえ。あーあ、またココでジツとしてるか」

「グリフォン、仕事大丈夫？」

わたしのせいで帰るのが遅れた訳だから少しばかり罪悪感がする

「ん。問題は（多分）無いよ

アリスの護衛以上の仕事なんて精々女王のお茶菓子の用意か掃除し

かないもん」

「そっか。なら平気だね」

………何か『護衛』とか冗談じゃない様に聞こえてきた………
本当にココは危ない。

12幕 『三月ウサギと眠りネズミ』（後書き）

以前は一気に出して苦労したので月一を心がけたいです……………

ヴェイン「眠りネズミ」

おっとりした天然キャラで三月ウサギとは双子の兄弟

山吹色のふわふわの跳ね毛とおっぴりのんびりマイペースな印象が
かわいい弟にしたいタイプ

三月ウサギからは護身用^{ステッキ}に仕込杖を持たされている

常に眠そう…と言うか万年春眠している

寝ているところを邪魔されると性格ガラリと180度回転し、不
機嫌になる

帽子屋の家に三月ウサギと一緒に居候をしている

ハーヴ「三月ウサギ」

眠りネズミとは正反対の性格。

ブラコン

鋭く勘がよさそうな印象があるが、実は結構鈍い。

グリフォンとは喧嘩友達

見かけによらず甘いものが好き（ほぼグリフォンに餌付けされてい
る状態）

自分と眠りネズミを家においてくれている事で帽子屋には恩を感じ
ている

眠りネズミを猫と蜥蜴から護る為に、大鎌を持っている（あと趣味
のため）

13幕 『緑の森へようこそ』 【 】 (前書き)

ちよつとひき肉とか物騒すぎる単語が出ます

平気な人には「何だこの程度で か」「この程度今までも出たじゃない」と思つ方もいらつしやると思いますが
私個人的には危険です。 です。

でもキャラや話のノリは変わりません

13幕 『緑の森へようこそ』 【 1 】

「よし。昼になるまでに確認ね。」
「うん」

あれから夜が来て何時間かしたら夕方が来た………
…まあ、うん。なんて言うのかな…夜の間は特にできることはなかつたけど、退屈はなかった

とりあえずハーヴはあれから平謝りするまでドリンクさんに解放してもらえなかった。

解放してもらったハーヴはずっと動きつ放しだったから汗もびっしよりで、グツタリして動かなかった（ヴェインが持つてるステッキでソレをつついてた。）

それにしても、ハーヴと同じ時間動いていたのにで全く息切れしていないドリンクさんって…

「アリス、トイレに行った？」
「う、うん」

先刻もう一度トイレには行ったからしばらくは大丈夫のはず

「ドリンクさんのお土産持った？」
「うん」

実は、先刻ドリンクさんから紅茶の葉とお茶菓子をお土産にともらった（とても香ばしい薫りがしてとても美味しそうだった）

「ハーヴに謝ってもらった？」

「一応」

横からのんびりとした口調でヴェインが言う
ちなみに、あの後は納得しない表情で渋々謝ってくれた。

……………謝る間もずっとヴェインを後ろに隠していたのは流石
(ブラコン) だと思う

「その質問はおかしくないか?!」

「「え。どこが?」」

グリフォンとヴェインの声が見事に八モる

「コイツ等……………」

「ソレはソウト、昼二八送らなくて大丈夫デスカア？」

「はあ？」

「なんでですか？」

「イイエエ、タダですねエ？ワリと前から殺人鬼が出没シテますシ」

「……………ちよつといい？ドラंकクさん」

「ハイ？」

「アンタ以上の殺人鬼なんているわけないじゃん。

あと、ドラंकクさんがハートの城の敷地内に入る度あたしが始末し
るって言われるんだから、やめて。というか止める来るな。」

「オヤ、手厳しい。」

肩を竦めておどける様にするドラंकクさんは全く反省はしていない
様だ— (反省する気すらない)

「デスが、冗談ではナク本当にいるらしいですよオ？」

「殺人鬼が？」

「エーエ。」

「あ、その話ならオレも聞いたぜ？かなり猟奇的な犯行らしいな」
「ボクも知ってるよお〜紫の長髪だとか緑の髪だとか〜、
なんか、あやふやでー亡骸の方はなんかぐちゃぐちゃでー、もう原
形もあんまりとどめてなくてー、そー。
ひき肉が服を着てるみたいだつてー」
「ふうーん？」
「あ？興味ねえのか？」
「グリフォン、食いつきそうな話なのに〜」
「いや、そーんな怪しい殺人鬼がいたらあたしは一回でも見てる筈
だろうけどさ、見たことないからなあー
ちよつと信憑性が無いんだよ。あと……………」
「あと？」

肩を竦めて苦笑するグリフォンはとなりのアリスを見る

「そこでアリス気絶してるからこれ以上そんなグロテスクな話をす
るのもどうかとね」

「オヤオヤア…見事に気絶シてマスねエ」

「わあー…」

「……………」

「ハーヴ？」

「気絶してる内に……………始末……………」

ガスッ

「ぐはあっ?!」

呟いて大鎌を構えようとした所でハーヴは吹っ飛んで頭を打って回
転し、体を強打して倒れた

もちろんハーヴを飛ばしたのはグリフォンとドラंकだった

「オイコラブラコンウサギ

てめえは先刻のあたし達の折檻の意味をまっつつ、たく理解してないんだな？ そうなんだな？ ああ？」

「全くデスよオ。先程の『お遊び』で懲りてくれたと思っていつかのデスクドねエ？ コレはもつとモット遊んでアゲル必要がアリそうデスねエ？」

グリフォンもドラックも笑ってるが、グリフォンの額には青筋が浮かんでいる

…… ドラックの方は依然としていつも通りに見えるが。

ハーヴは我に帰った様にわたわたとする

「ま、待て！ オレが一体何を……！」

「よし。よく分かった。テメエが折檻の意味を覚えるまでじっくりと遊んでやる。表に出る裏庭に行くぞ」

「おい！ 今あんたらの言ってる『遊ぶ』は一方的暴力だろ？！」

「それがなにか？」

「こいつらは悪魔か？！」

「何を言うハーヴ。あたしは只のしがない菓子職人だよ」

「『只のしがない菓子職人』がオレを折檻すんのかよ！」

「怒り心頭してるから」

「茶目つ気たつぷりつぱく言っつな！！」

「まあまあ、折角ワタシとグリフォンサンが遊んでアゲルのデスクから、喜んでくだサイよオ？」

「喜べねえ！！ グリフォンだけならともかく二人は無理！！」

「根性でドウにかしてくだサイよ」

「無茶言っつな！！！！」

「ぐだくだ言っつてないで裏庭行くよほら、」

「デスネ」

「んなっ?!お、おい!ヴェイン、こいつら止める!!」

ドランク一人でもキツイのにそれにグリフォンが加わった事により、ズルズルと強制的に裏庭に引きずられる

ヴェインに助けを求めても無情にも逝ってこいとばかりに手を振られた

「ハーヴをよろしくー」

「ほい。任された」

「ヴェイン君はアリスをお願いしますねエ?」

「うんゝわかったー」

「はっ、薄情者!それでもオレの兄弟か?!」

「よいしょっと」

悲痛に叫ぶハーヴを余所にヴェインはアリスを背負ってベッドに運んで行く

ハーヴには冥福を祈るばかりだ

>>>>>

.....

.....あれ?

目を開けたら、わたしはベットの上に寝ていた

(こいつって、どこだっけ?)

「あゝ。起きたあ?」

「……ヴェイン?」

「(……あ、ドラंकさんの屋敷か)」

「……」

「ヴェイン?」

「ごめ、んねー?」

「へ?」

「殺人鬼の話、してー」

「へ、あ。」

「殺人鬼の話、次からは、あまりしない様にするねえ」

「あ。いや、気絶、しちゃってた?」

「うん」

「そっか、ごめんね」

「ううん、ボク達の方が悪いから」

ボク達という言葉でなんとなく周りを見渡すと、先刻までいた人達
がない

「……あれ?ドラंकさんとグリフォンは?」

「まだ、外、かなあ?」

「外?」

「正確にはー裏庭かなあ?」

「裏庭?」

「二人ともーハーヴと遊んで、るー」

「ハーヴと?」

「うん、昼になったら戻って来るよー」

「……つまり昼になるまでずっと遊んでるの……?」

「だねえ」

「先刻もやってたのに大丈夫なのかな……」

「ドラंकさんはともかく、あの二人は単細胞だから」

「……………何気に酷いね」

「そうかなあ〜?」

「うん。」

そっだよ。流石に酷いよ。

ヴェインって毒舌だったんだね…?

「う〜んとお?今、夕方だからー、お昼になるまでどこかに行く?」

「いいの?」

「うん〜、どうせなら森を案内しようかー?リスさんとか、カワイイのが沢山いるんだよ〜」

そう言っってヴェインはほわぁ、と笑っ

(カワイイのは君です…!!)

「じゃあー、置いて行くお手紙、書くからちょっと待っててねえ〜」

ビリビリ

カリカリカリ

「じゃ〜、行こっかあ〜」

「うん。て、本当にいいの?」

「うん〜、大丈夫だよ〜」

お友達に会いに行くだけでもん〜」

「友達?」

「うん。あー、」

ヴェインは何か思い出したように声を上げてわたしに右手を出して

来た

「手、繋ごー？」

「えっ」

「だ、めー…？」

「滅相もございません!!」

うん。このカワイさにやられない人がいたら見てみたい。

何でこんなカワイイの？犯罪級だよな？

ハーヴがブラコンなのも分かるような気がして来てるのが怖いよ

>>>>>

■■■■■■■

「ふう、遊んだねえ」

「デスネエ」

「こっつ、この…鬼ども…!!」

「あの程度でへたれるとかどんだけへタレなんだよハーヴ」

「巧い事言っただつもりか?!」

「…ん？ねえ、ドラंकさん？」

「ハイ？」

「無視か！？ぶふっ!!」

大声を出すハーヴをグリフォンとドラंकは床に叩き付けて踏み付けてそのままテーブルに置いてある紙を手取る

「これってさ、ヴェインの字だよな？確か」

「？……アア、そうデスネエ」

置き手紙ってヤツでシヨウかネエ？」

「見りゃ分かるって」

「エーと？』アリスと行ってきます』」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

13幕 『緑の森へようこそ』 【 】 (後書き)

………いつになったらハートの城に帰れるんでしょうか？

書いている本人が一番不安です

そしてアリス達のキャラをとてつもなく壊したくなる今日この頃

14幕 『アリスとピンクの猫』 (前書き)

09/08 編集しました

14幕 『アリスとピンクの猫』

友人の家へようこそ

「ちよつとちよつとちよつとちよつと!?」

どうすんのさ!あの弱っちい二人がああ森の中を歩いてるの?!」

「あああああああ、ヴェイン!

あの青リボンに無理やり連れて行かれたのか?!」

ガスッ

「ッ痛!あにすんだよグリフォン!」

「黙れブラコンウサギ!あの置手紙を見てアリスが無理やり連れて行つたとかありえないこと言うな!」

「ありえなくもねえだろ?!あの女、ヴェインを絞め殺そうとしてたじゃねえか!」

「ンなわけないでしょうが!」

抱きしめてただけだ!と、グリフォンとハーヴが口喧嘩(?)をただ無言でその光景を見ていたドラंकはポツリ、ともらした

「ソウいえば、あの森には獣の他にもトウリー君もいましたネエ」

「.....!!!」

「オヤ?ハーヴ君、ドチラに行くつもりデスカア?

「ヴェインを連れ戻しに行くに決まってるだろ?!」

ダッ

「あー！何であたしの周りにはなんも考えないで突っ走るのが多いかなあ?!」

「アナタ自身もソウだからじゃないですかア？」

「あー、もう今はこんなことでも良いよ。あのバカ自分が方向音痴で自覚してないんじゃないの？」

「シテませんネエ」

「……………どする？ドリンクさん。」

「サテ、アリスとヴェイン探しに行きまシヨウか？それともバカを探しに行きまシヨウか？」

「そりゃ、アリスたちっしょ」

「デスヨネエー」

>>>>>

ところ変わってアリスとヴェイン

「ねえ、ヴェイン」

「ん〜？」

「その友達つて「ヴェ〜〜〜イン!!!!!!」」

「うあつ?!」

「ヴェイン?!」

友達について聞こえようと思ったら突然木の上からピンク色のネコミミ少年がヴェイン飛び降りてきた

ピンク色の子はヴェインと一緒に倒れてゴロゴロと転がっている

「ヴェイン〜あ〜そ〜ぼ〜〜!!!!!!」

「や、やだっアリス、た、たすけて…っ」

「……………アリス？」

「え、……………?」

「っご主人！！！！」
「うひゃあつ?!」

ピンクの少年がヴェインから顔を離してこっちを見たと思ったらヴェインを飛ばしてこっちに飛び込んでくる
その衝撃でしりもちをつくわたしにかまわずピンクの子はぎゅう、とわたしを抱きしめる

「た、助かった……」

「ご主人ご主人っ」

「え、あ、ちよ?」

「ねえねえ、なんでご主人がココにいるの?ご主人、おねーちゃんともーとはどうしたの?」

「ご主人だけ?でも嬉しいなっ!ボク、ご主人が一番好きなんだからっ!……?ご主人?」

さっきからわたしに抱きついて『ご主人』と連呼しているけど、わたしはこの子を知らない。

「あ、ごめん…君、会った事ある?」

「ご主人?なに言ってるの?ご主人ボクを忘れちゃったの?」

「ご、ごめん……」

「あ、トウリー……」

「なんだよ」

おずおずとヴェインがトウリーに声をかけるとトウリーはじろりとヴェインを睨む

「あの、アリスを離し、て?」

「やだよ。何でようやく会えたご主人と離れなくちゃならないの?」

「で、でも…アリスが困ってるよ……?」

さらにヴェインが言うと睨む目をさらにキツクして叫ぶ

「うるさいなっ！そもそもヴェイン！ボクのご主人の名前を気安く呼ばないでよー!」

「あ、う……」

「ね、ご主人っ！今から僕と遊ぼっ?」

「えと、トウリー、だっけ?」

「……。」

「え。違うの?」

「ううんっ。ボクはトウリーだよ？チシャ猫のトウリー。」

今、少しだけ悲しそうな顔をしたような気をするんだけど…
笑うトウリーに気のせい?と思えてくる

「じゃあトウリー、ヴェインに謝って?」

「なんでっ?!」

「さっきのトウリーの言葉は酷い。ちゃんとヴェインに謝って。」

「ごめんなさい』って謝って。」

そういうと少し泣きそうな顔になって頬を膨らませていたけど少し
すると口を開いた

「……………ヴェイン。」

「…!な、なに」

「ごめん」

「え、あ…うん……」

「じゃ、ご主人っ！今日はボク帰るけど、次は絶対に遊んでねっ?」

「うん。またね」

「約束だよ？じゃあね！」

ちゅっ、

「え？」

「……………あ」

「へへー、またねっ」

にははっ、といたずらっぽいな笑みを残して跳ねながら森の奥に消えていくトゥリーをアリスとヴェインは啞然としながら見送っていた

……………キス、されちゃったよ

いや。ほっぺにだけど

「え、と…ヴェイン、あの子が言ってた友達？」

「違うっ！違うよ！！あんなの友達じゃない！」

『友達』とはトゥリーのことかと思ったけど、ヴェインは大声を出して否定をする。

そんなヴェインに目を丸くしているとヴェインは気まずそうに視線をそらして小声で呟いた

「あの子、チエシヤ猫のトゥリーって言って、いつも僕をいじめめる嫌なにゃん」……………

だから、いつもハーヴが追い払ってくれるんだけど……………」

「ああ。ハーヴならやりそう」

あれはいじめてるといふよりじゃれついてるだけな様な気もするけど、と思ったけどさっきのあれもあるし、本気でヴェインはトゥリーのことを嫌っているようなので言っのを止めておく

「そついえば、友達の家って?」
「んー!? あー。そうそう。えっとねえ、こつちだよー」
「え。そつちて獣道じゃ……………」
「へーきへーき〜」
「ええ?!」

平気じゃない!大丈夫じゃない……………!!

「じゃ、行こつか」
「は?!ちよつと!」
「アリス?早く来ないとおいてくよー?」
「あ!待つてよヴェイン!」
「早く〜…………ね?」
「うん、うん。」

>>>>>

くぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ

「ねえ、まだなの?」
「もーうちよつと〜」

くぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ

「ねえ、これって迷ってない?」
「うん〜?迷ってないよお〜」
「本当に?」
「うん。」
「そ、そつか……………」

14幕 『アリスとピンクの猫』（後書き）

和の建物のことは次回に。

トウリー「「チエシヤ猫」」

ピンクの短髪にくりくりした大きな目……ぶっちやけ言ってシヨタ。
結構短絡的で感情的

ぶかぶかのセーターのような服を着ている

遊ぶのが好きでじゃれようとしますが、三月ウサギに大鎌を向けられ、トカゲには包丁を向けられる

アリスの事を『ご主人』と呼び、懐いている

こっそりとあまり物をもらいに度々城にもぐりこんでいる

14・5幕 その頃の城組（前書き）

本編にもう少し時間がかかりそうなので番外でつなげるのです！
セリフ会話だけです

14・5幕 その頃の城組

「遅いわ」

「遅いですね」

「……………遅い」

「何をやっているのでしょうか。グリフォンは。」

「ですね。戻ったら、……………仕置きです（ぼそり）」

「聞こえてるわよ、サアム。」

「……………すいませんね」

「まあ、別にいいけど。お仕置きは殺さない程度にやって頂戴よ？」

「……………」

「……………」

「なによ。」

「……………いえ。」

「女王陛下がそう仰られても説得力が皆無なので」

「まあっ！酷いわ！！」

（否定できない……………）

「そういえばハング、キングはどこに行ったの？」

「いえ。私もずいぶん前から陛下をお見かけしていませんが」

「サアムは何か知ってる？」

「……………さあ？私も、わかりません。」

食事のときにも、顔。出されませんから。」

「けど如何なさったんです？突然」

「ちよっと、アリスが来てからキングが不機嫌で」

「いつものことじゃないですか」

「そんなことないわよ。キングだって笑われるのよ？」

「……………」

「……………」

「……………なによ。二人とも。」

「い、いえ……」

「……………なにも。」

「話を戻すけど、キングって以前から気難し屋だけど、どうしてあそこまでアリスを毛嫌いするのかしら？」

「気に食わない、んだと。」

「気に食わない？アリスが？なんでよ。」

『前』の時はそんなことはなかったでしょ？」

「『今』のアリスと『前』のアリスは別でしょう」

「そうねえ。『前』のアリスは嫌な子だったわ。」

「彼女は、アリス。ではない。なぜなら、この国に、受け入れられなかった。」

「それもそうね。……………って、なんで『今』と『前』のアリスの話になってるのよ！」

「女王陛下が『前』のアリスは陛下に毛嫌いされてなかった。と仰ったからでしょう」

「そうよ！むしろキングは『前』の子を傍に置いてたわ！！！」

「……………結局、処刑しましたがね。」

「調子に乗りすぎたのよ。あの子は」

キングの隣はあたくしの場所なのに。キングの傍に置かせて頂いているからってべたべたして……………」

「……………」

「ああ！そう、そうよ！何でキングはアリスが嫌いなのです！あんなに可愛らしいのに！」

「……………それ、だとおもいます」

「それって？」

「女王陛下。混ぜ返して申し訳ありませんが、女王陛下は『前』のアリスのことをどのように思っていますか？」

「キングにべたべたして最悪で大っっっっっっっっっっ嫌いな子よ！」

「では、今のアリスは？」

「可愛らしくでいい子で大好きよ？」
「それです」
「へ？」
「……………ですから、それ。です」
「それってどれよ。」
「……………」
「なによ二人とも。黙り込んで」
「いえ。……………多少、気の毒になったので。」
「報われないとは正にこのことなのですな。」
「なによ二人とも!!」
「さて、サアム。グリフォンへのお仕置きを考えましょうか。」
「そう、ですね。」
「なんなのよ!!…二人とも!」
「女王陛下。それは自分で気づかれる課題です」
「……………。あたくしの命令でも?」
「命令だとしても、です」
「(こくり)」
「意地悪ね。二人とも」
「……………それが。女王の、為。」
「むうー……………」
「むくれても駄目です」
「わかってるわよおー。あ！」
「じゃあ、あたくしもお仕置きの話に混ぜてちょうだい!」
「女王陛下、公務はどうしました?」
「そんなもの、犬にでも食べさせてあげるわ」
「食べさせないでください。重要書類もあるので。」
「相つ変わらず融通と冗談が聞かないわね」
「……………おい」

「あら。キング？どうしたの？」

「あの小娘はどうした」

「アリスのこと？」

「……………ああ。」

「さあ…あたくしは存じませんわ。キングはなにか知ってる？」

「確か、グリフォンと帽子屋の屋敷に行っている筈ですが」

「あのいかれた?!」

「あ、はい。」

「なにやってるのよキング！アリスがあのカレ屋に殺されちゃったらどうするのよ!」

「い、いえ。グリフォンがついているので問題は無いかと…」

「あるに決まっているでしょう?!」

「……………」

「あら？キング？」

「眠る。兵士もドラ…女王も寄せるな」

(そんなこと、言わずとも…誰も近寄りません。)

「キング、どうしたのかしら。折角お会いできたのに」

「さて、職務職務……………」

「私も、厨房に…もどり、ます」

「あ！ちよつとお？ふたりともお!」

14・5幕 その頃の城組（後書き）

……つなぎにはなりましたがなんだか破茶目茶です

15幕 『日本屋敷へようこそ』 (前書き)

長い間放置だった分長めです。

こちら辺から『前』のことも出てくるはずですよ

15幕 『日本屋敷へようこそ』

「ここだよー」

「……………え」

「アリスく？」

「……………なに、ここ……………」

「だから、お友達の家。」

「……………」

今現在、わたしたちの目の前にあるヴェイン曰く『友達の家』。
……………どこからどうみても『家』のレベルじゃないって。

「ん〜、とねえー…ミヤビ曰く、日本屋敷、だってー」

「日本屋敷……………」

日本の家って言うのは随分前に本で見たことがある。
あるけどこんな感じじゃなかったはずだけど…
確かもう少し洋風な感じの建物だった気がする

「なんというか……………雰囲気こそぐわないね」

「そーお？ここにはない感じで僕は好き、だなあ〜」

「そんなモノなの？」

なんというか、モノは言い様（？）だとつくづく思うね

「……………て、あれ？ヴェイン？」

いない。

目の前の建物を見ると扉が少し開いてる

「は、入っていいのかな？」

半開きの扉を開けて恐る恐る日本屋敷の敷地内に足を踏み入れる

「お邪魔します……」

■■■■■■

「……………なんで？」

「それは俺が聞いてえよ」

所変わってハーヴとグリフォンは森の中でたまたま偶然遭遇していた

「なんでアリスを探してた筈なのにあんたに会うの?!」

「なんでヴェインを探してた筈なお前に会う?!」

「お前……………!!」

「……………やめよう」

「ああ。不毛だな」

「で? あんたはその方向音痴の足でどこを探してたの？」

「遊びに行くとこつつつたら、赤毛のそこだろうよ」

「反対方向だよ! ここ塔! 立ち入り禁止の区域!!」

「っ、ここ登ったらヴェインが見えるかもしれないだろ?!」

「見えねえよ!？」

「見えるかもしれないだろ?!」

「塔の高さなめんな！視力どれだけいいんだよー!!」
「俺の愛リーダーはどこにいようとあいつをキャッチする!」
「…あんだ、遂に頭イカれて電波拾う様になった?」
「うるせえ！もう塔はいい！」
「ヴェインを見つけないぞ！赤毛の屋敷へ!!」
「そつちは城だ!」

■■■■■■

「こんにちは、いる〜?」

ヴェインがひよつこりと顔を出すとそこには赤毛の男がいた
男はこれまた紅い『キモノ』というとても珍しい服を着ていた

「お。よおネムリン。」

「ネムリンじゃないよ、ヴェインだよー」

「いっつも眠そーにしてんだろーがよ。」

「ん、否定はしない…」

「それはそうと、ネムリン。お前さん一人で来たのか?」

「ん、ん。アリスと〜」

「『アリス』?生きてたのか、あいつ」

「別のアリスだよ〜」

「ああ、別のが来たのか。……ま、そうだな。

首を斬られて生きてるなんぞ、それこそ番人にだって出来やしねえ
で?アリスがどうしたって?」

「うん。はぐれた」

「そうか。はぐれたのか……って、オイ!はぐれたのかよ?!」

「うん。」

「どこら辺で…？」
「屋敷に入った辺り」
「……………。そのアリスの格好、『前』と同じか？」
「……………。色以外は。」
「危ねえ！……………。けど、まあ。アイツらにみつかんねえ限りは大丈夫だろ……………」
「みんなは…？」
「スズとアンは使いに出してる。カナデは……………」

言いかけた所で赤毛の男は見る見ると顔色が悪くなっていく

「……………？どうしたのー？」
「アイツ、道場にいるんだった…。」
「……………。まあ、大丈夫だろ」
「……………そーだねえ」
「とりあえず『アリス』のこと教えてくれよ。ネムリン」
「うん、とねー。青いリボンで、肌のあんまり見えないの着てて、かわいくてほわほわで、僕がぎゅ〜するとあわあわで逆にぎゅ〜されて〜」
「待て。待て待て待て待て。
始めはまだいいが後半が分からんのだが…。」
「あー、まだ話途中だよお？」
「あ、はい。すみません」
「んでね〜、ドラंकさんとかグリフォンのお気に入りに入るんだ〜
特にグリフォンはいつもより叩いてたし、ドラंकさんもグリフォンに加勢してたし」

ガチャッ

バサバサバサバサッ

すたすたすたすた

「?どこいくのー?」

「道場だ!その『アリス』無事に返さねえと俺が殺戮狂共に殺される!」

■■■■■■

「こんにちは、『アリス』」

「へ?」

名前を呼ばれて振り返ると淡い色の……なんて言ったか、そうだ。

『キモノ』だ。を着たとても美人で優しそうな微笑みを浮かべてる人がいた

……けど、その唇からこぼれた言葉は訳の分からない嫌味、皮肉だった

「あなた、まだ生きてたのね。王様が匿ってたのかしら?」

「な、なに……」

「あら?少し印象変わった?流石に大っぴらに歩けないかしら」

何をいつているんだろう。この人は何を言っている?

「……静かね。以前の喧しさはどうしたの?

本当に悔い改めたのかしら?まあ、そんな事とても信じられないけどね」

突然話しかけられて初対面なのに名前を呼ばれて、それで今は嫌味を言われる

黙っていれば次々に言われる皮肉と嫌味に何がわたしの中で切れた様な気がした

「突然なに?!何で初対面の人にそんな訳の分からない嫌味事を言われなきやなんなの?!」

「初対面?訳の分からない?それこそ嫌味ね

あなたが私達に何をしたか覚えていないの?」

「だから!人違いだつてば!」

「そんなはず無いじゃない。『アリス』なんて早々いないんだから」

「そんな事知らないよ!」

「もういいわ。結局王様はあなたの事が可愛かったのね。

でも、あなたがいると不快な人が五万といるの。」

そう言つてキモノの女の人は持つていた事に気付かなかつた、長い刃物を構えた

「死になさい」

「!! ちよつ、ちよつと!冗談が過ぎない?!」

「冗談?いやね。私はこの手の冗談は嫌いよ

それにこの程度、あなたの上して来た事に比べれば可愛いわ」

刃物が振られる

早い。避けられない。

ハーヴ達の所と違つて頼れる人もいない

死

！

「そこまで。」

声が出たと思うと刃物が鼻先を掠める

髪が少し切れたけどそんな事気にしてられない
心臓がバクバクと大きな音を立てているのがよく分かる
自分が生きていると言う驚きと安心でその場にへたりこんでしまう

「カナデ。おいたが過ぎるぞ」

「ミヤビ…！」

わたしに刃を向けている人の肩を抱いている赤毛の人はいつの間にかそこにいた

「元気なのはいいことだ。」

けどカナデ、この嬢さんは殺すな」

そのカナデと呼ばれた人はミヤビと呼ばれた人の腕を振りほどいて
掴み掛かる

「なんで？彼女は『アリス』よ！

あなたも『アリス』を嫌悪していたじゃない！それなのになんで彼
女を庇うの?!」

「別人だ。お嬢さんはアレとは別の『アリス』だ」

「嘘よ！アリスなんてとても稀で希少なはずよ！『私達』の時に二人も出会うはずは無いわ！！」

「でも事実だ。『前』は死んだんだ。王と女王によって公開処刑でお前さんも見ただろう」

「違うわ！王様は彼女を可愛がっていたわ！きっと身代わりでもたてたのよ！」

『前のアリス』とか『処刑された』とか訳の分からない言葉が飛び交う

………分からない。解らないけど、歓迎されていない事だけは分かる。

『わたし』が求められていない事が分かる

二人が言い争っている間にパタパタとヴェインが走って来るのが見えた

「アリス、大丈夫？」

「……………あ」

「アリス？」

「……………ヴェイン……………っ」

「は、はうーっ」

ここぞとばかりにぎゅう、とヴェインを抱き締める
ようやく出会えた見知った顔に涙が出て来た

こわかった。こわかった。こわかった。こわかった。こわかった。
こわかった。

どうしようも無くこわかった。

ハートの王様の時よりも

ハーヴの時よりも

あんなに否定されて、あんなに疎まれて

あんなにハツキリと、憎悪を向けられて

もうみんなに会えないかと思った。

文句だっていいたい

何でわたしを置いて行ったの、って

何でわたしばかりこんな目に会ったの、って

でも、今はこれだけでいい。

何も言わずに抱き締めさせてくれるだけで

15幕 『日本屋敷へようこそ』 (後書き)

わたしは、『わたし』なのに。

16幕 『夢と忘却と帰還』(前書き)

わーい。前回投稿から早一年ですよ！もう、時間が経つのは早いんだから

……………言い訳としましては、ずっと携帯電話が壊れていて一ヶ月くらい前に機種変をようやくした、といつところですor2

16幕 『夢と忘却と帰還』

気づくとわたしは何もないところにいた。
草原と青空以外は本当に何も無い。

いや 全然違う、まだ、あった

草原には丘があつて、丘の天辺には大きな、大きな大木があつた
そこまで行つてみるとひとりの『人』がいた
その『人』は真つ黒いローブを羽織つて、でもローブのフードは取
つているのに、まるでフードを被っているような……違う。それ
は違う

—その『人』の周りだけ暗闇みたいに顔が見えなかつた《……………
……………》
その『人』はわたしに気づくとにこりと微笑んだ

……………？どうして、顔が見えないのに笑つたってわかつたんだ
らう？

『久しぶり。アリス …………… うん？直接話すのは初めてだから』は
じめまして』かな？』

だれ？

『誰でもないよ。僕はボクだ。夢だ。世界だ。時間だ。命だ。
そして、この世界で一番くだらなくてちっぽけなものだ。』

……………？

『うん…………… やっぱわかんないか。本当に、アリス。どうして君

はこの国にこれたんだろうね?』

……………どういふこと?

『そのままの意味だよ。そうだね、君に設問を投げかけてみようか』

……………。

『君は、なにかを失った?君の還る場所はある?あるならどうしてこの国に留まる?』

失ってない。帰る場所は当然ある。留まる理由は……………

『思いつかない?おかしいね。普通の人間なら死に物狂いでもこの世界に戻るうとするものなのに。どうしてだろうね?君は何も失ってないし、還る場所もあるっていふのに』

……………

『怒らないでよ。本当のことだろ?……………仕方ないからもう一度聞いてあげるよ。少し項目を増やしてね』

『君は、なにかを失った?君の還る場所はある?あるならどうしてこの国に留まる?』

『失ったのなら、君はいつたいなにを失った?』

「アリスッ！気づきましたか？」
「ここ……ハートの城？」
「ええ、ええ。そうです。そうですよ」

目を覚ましてまずいちにあったのがハングの心配そうな顔
わたしはいつのまに、どうやって帰ってきたのか。

正直に言っただけ何も覚えて無い。
ヴェインと一緒にヴェインの友達って人の家に行ったら殺されそう
になって

赤毛の人が助けてくれて、ヴェインにあって……
それで気づいた今、わたしはハートの城のベッドに寝ていて、ハン
グが目の前にいる。

「ハング……」
「グリフォンが貴女を連れて帰ってきた時は何事かと思いましたよ」
「ごめ、んなさい……」
「いいえ、いいえ。貴女に大事が無く安心致しました」
「うん。でも、その……」

ハンッ

「ハングッ！アリスは気づいてっ？！」
「……テイ、っ
「！」

突然大きな音を立てて扉が開いて、ティーの声を聞いてそつちをみると……見る余裕もなく鳩尾にティーが飛んできた
とんでもなく痛い。きつと胃に何か入ってたら……
でもティーはそんなわたしの事はお構いなしでそのままわたしをぎゅうぎゅう抱きしめる

「ああ、よかつたわアリス！これもわたくしが一途にあなたの無事を祈ったおかげね！」

「……………女王陛下」

「あら？まだちょっと顔色が悪いのね？気づいたのなら遊ぼうかと思つたのに、おあずけかしら？」

「女王陛下」

「仕方が無いからあなたが全快するまで遊ぶのは待つてあげるわ。あたくしの寛大さに感謝して頂戴ね、アリス！」

「……………」

べりっ

まさにそんな音がしそうな程キレイにティーは剥がれた……と、言うよりハングが剥がしてくれた。

けど、正直鳩尾の痛みでそつちに注意が向けられない

「んもう！なによハングの無礼者！！首を跳ねて欲しいの?!」

「女王陛下、御言葉ですがアリスはまだ疲れておいでです。今はアリスを安静に寝かせておく事が優先事項かと。」

「ふんだ。あなただってアリスが帰ってきてから一睡もしてないじゃないの。すぐに眠るべきなのはあなた自身じゃなくて？」

「え……………」

「ちよつと聞きなさいなアリス！ハングったらあなたか帰ってきて

から一睡もせずにあなたを看っていたのよ？

しかもちやあんと執務もこなしてね。メイドに任せたくないって気持ちもわからなくもないけど無謀にも程があると思わない？」

「嘘お……………」

「あたくしが嘘をつくと思って？信じられないならハングの顔を見てみなさいよー」

鳩尾のダメージから少し回復した私はティーの言葉通りハングを見上げてみる

ハングは見られたくないようで顔を逸らしているけど、確かに顔色が悪く少しやつれていている感じがした

「……………わたし、どのくらい寝てたの？」

「そうねえ……………どのくらいだったかしら？」

「どうして覚えていないんですか。およそ四巡前、ですかね」

四巡前……………ということは大体わたしの来た世界で言っただけと、というか四日目になる前？で、あつてるよね？

「……………そんなに、ごめんなさい」

「アリス、貴女が気に病む必要は御座いませんよ。私共は自らの意思であなたを案じているのですから」

「でも……………」

「いいのですよ、アリス。今は、ゆっくりと心身を安めてください。」

「うん、……………ごめん」

「それとアリス、私は謝罪を繰り返されるよりも、一度のお礼を言われる方が嬉しいです」

少し冗談めかして言うハングに思わず笑ってしまった

そんなわたしに、優しい微笑みを浮かべて丁寧な手つきで髪を鋤いてくれるハング

「!!! なっ、なに?!」

「失礼。御髪が乱れていたのです」

ささやかなイタズラが成功した。

というように綺麗な顔で綺麗に笑われるとわたしにはどうすればいいかとんとわからなくなっ、ハングを直視できずに思わず俯いてしまう

「~~~~っ!あ、……ありがとう」

「いえいえ」

「ちょっと?なに勝手に二人っきりの世界に浸り込んでいるのよ!」

「なっ!ひ、浸り込んでなんか……!!」

「ふーんだ。あたくしだって、本当はキングともっとイチャイチャラブラブしたいわよう」

あの人とイチャイチャラブラブって……あの人がそういうことをするなんて想像もつかない。……まだ一回しか会ったことないけど。

……うん。とっても綺麗な顔ってことは覚えているけどあの人デレる、となったら全くもって想像がつかない

「ちょっとアリス?流石に失礼じゃなくって?

それこそキングは普段はああだけれど微笑むとそれはそれはとーっても!綺麗な表情をなさるのよ!!」

「ちょ!!!なに心のなか読んでるのティー!!」

「アリスったら顔でバレバレなのよー!」

「 疲れたからって寝てるわ。」

(嘘だ！絶対、確実に嘘だっ！！！)

「まあ、寝ている人のことを気にしても仕方ないから寝なさいな？」

「いやいやいや！寝てないでしょ確実にっ！！！」

「あら。何を言っているのアルリス？グリフォンなら今ごろ（血の海に）寝ているわよ。」

「なにか不穏な単語が隠れている気がするっ！！！」

「気のせいよ」

気のせいなんかじゃないはず！

グリフォンの声が聞こえたとかじゃないけど、絶対に気のせいじゃないはず！

困ってハングを見上げるとにこりと微笑んでわたしを寝かせる

「ちょ、ちょっと？ハング?!」

「アルリス、あなたは間違いなく疲れています。だから幻聴なんて聞こえてしまうのです」

「え、いや、幻聴って何も聞こえん」

「グリフォンが心配なのでしたら彼女が回復したらこちらに来るよ
う言いつけておきますよ」

「う、うん……………」

「眠くなくても横になっていてください。それだけでも、体は休まりますから」

何か欲しいモノがありましたら遠慮なく言いつけてくださいね？」

「あ、うん、わか、った？」

な、なんか笑顔で言いくるめられたというか無理やり押し切られたような気がするっ！

くぐりつらきさうじつに

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

も、もうやだ！どこかに深い穴があつたら入りたい！！
恥ずかしいどころの話じゃないよう……………」
ちらりとハングを見ると目が合つて丁寧にお辞儀される

「畏まりました。 女王陛下、行きますよ

「ええ？なんでよ。 あなただけが行けばいいじゃないの」

「女王陛下をひとりにしたら何をしてくるか見当もつきませんので
「失礼ね。」

「いいから、行きますよ女王陛下。」

「いやーよ！」

「……………（ぼそり）」

「……し、仕方ないわね！ハングがそんなに言うならついて行つて差し上げますわよ！」

「そうですか。ありがとうございます。ではアリス、安静にしてくださいね」

変なお嬢様っぽい口調になつて部屋を出ていくテイーに聞こえなくお礼を言いながら続いて部屋を出ていく
何を言ったの、ハング……………」



「んもう、少しくらいアリスと一緒にいさせてくれてもいいじゃないの。あたくしはなにもしないわよ」

「そうですか？では、その鎌はなんですか？」

「……………。あんな可愛い子、首にしないほうがおかしいのよ」

「遊び相手がいなくなってしまうですよ？」

「グリフォンがいるわ」

「彼女だけで満足できるのですか？女王陛下」

「……………。無理ね。でも、あなただってそうじゃなくって？ハン

グ

「はい？」

「あなただつて、アリスを傷つけたいと思っているのでしょうか？肉体的な意味でも、精神的な意味でも」

「ええ、否定はしません」

「ならわかるでしょう？あたくしの気持ち」

「ええ、ええ。痛いほど、嫌と言うほど理解しております。」

「なら、」

「しかし、私は待とうと思っているのです」

「……………待つ？」

「ええ。アリスが、私の愛しい方が、役持ちになられるまで」

「どれだけの時間がかかるかもわからないのに？」

「それどころかあの子が元の世界に帰ってしまうかもしれないのに？」

「時間はいくらかかっても構いませんよ。後の愉しみさえ思えばい

くらでもこの衝動は抑えることはできます」

「あら、それじゃあ『衝動』とは言わないんじゃないですか？」

「それもそうですね。　　そうそう、もうひとつの質問も答えま

しょうか。彼女は彼女の世界に帰ることはありませんよ」

「どうしてそんなことわかるのよ？」

「彼女は分かっていないのですよ。」

「自らが何を失ったのか。自らが何を犯したのか。自らが誰なのか」

「……………どうということ？アリスはアリスでしょう？」

「そのままの意味ですよ。彼女は確かにアリスです。名もないアリス。それだけです」

「もういいわ。相変わらずあなたの言葉は意味不明ね」

「そうですか？」

「そうよ。もういいわ、サムにアリスのご飯を作ってもらいなさい」

「はい。畏まりました」

16幕 『夢と忘却と帰還』 (後書き)

なにやらブラック的な展開になってしまいました。(^^) / ナ
ニガアツタシ

顔の見えない人とは？ハングの言葉の意味は？
二人の言う『アリスの忘れているもの』とは？
ついでにグリフォンの生死は？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0720h/>

おもちゃの国のアリス

2011年12月21日00時58分発行